
彩りのマーメイド

わさび侍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彩りのマーメイド

【Nコード】

N2483T

【作者名】

わさび侍

【あらすじ】

「愛の告白？『私と子作りしてください！』って言えば良いんじゃない？」「お前大丈夫か？」●人間に恋心を抱き、本能のまま人間界にやってきた人魚の漣。彼を追い求めて、宿舍『色彩荘』で暮らす事になる。女装の麗人、元不良のお姉様、そして恋しい彼。宿舍や学校の愉快的仲間と彩りある日々を過ごして恋をして、漣は人間となっていく。一年以内に彼と結ばなければ海の泡となるという掟を抱えながら。

序章：人間になります

「人間界ですって？」

「そお、あんた興味無いの？」

三人が入れば丁度良い洞窟。漣みおと友人の談笑の場であつた。

間抜けな声で応じた漣は長いブロンドの髪を弄りながら目を輝かせている雪を見上げる。背の低い漣は、座つても自然とこうなってしまうのだ。

「雪、あなたまさか行くのです？」

「行かないよつ。だって恋愛失敗したら嫌じゃん？良い男ここで見つかるわよ！」

「へえ。」

「興味無さそうね。」

呆れ顔で言う雪。彼女達は恋愛事に関心が高まる年頃なのだ。

「だって、もっとお洒落したいし遊んでいたいですもの。それに人間界は歩かないといけないしめんどくさいって、人間と結婚したお姉様が言っていました。」「確かに、足なんて邪魔だよね。」

漣は自分の尾をばたつかせ、立ち上る泡はすぐに消えてしまう。「泡になんて、なりたくないですわ。」

彼女達は、人間が到達した事のない遙か深海で生活している。つまり人魚である。人間に発見された事はないし、彼女達も人間を見る機会はあまり無い。

だが、人魚界は女性より遙かに男性が少なく、それ故人間界に旅立ち男性を見つけて結婚し、そのまま人間として生きる人魚の女性

も一部居る。

ほんの、ほんの一部だ。

——もし、人間界で一年以内に恋しい男性と結ばなければ、その人魚は泡となって消える——

人魚界には厳しい掟があり、恋愛事に関しても、多くの決まりがある。

そんな事を思い出しながら、漑は大好きな家族の元に帰る。大事に育てられてきた漑は、何より家族が好きだった。

漑の家族、泡沫家^{うたかた}は有名であり、縄張りも広い。泡沫家に仕える者は漑をお嬢様と呼ぶ。人間界でいう大富豪の家の娘なのだ。

「おかえりなさいませお嬢様。綾様から御手紙が届いています。」
召使いが、紙の入ったコルク瓶を示す。人間界で生活している姉からだ。人間界と人魚界を通じる配達員も存在するのである。

漑は急ぐように紙を取り出すと、メッセージに写真が添えられていた。姉と、夫と生まれたばかりの子どもだ。

「いいなあ、お姉様……」

先程、友人にはああ言ったが、漑は人間界に興味が無いわけではなかった。寧ろ、好奇心旺盛な漑は、一度人間を見てみたいと思っていた。

人間界を目にするには、魚になり海面に昇らなければならない。魚になるのは自由自在で、漑も簡単に出来た。金色の美しい魚だ。夢中で昇っていく。人類未踏の深海から海面の距離は、泳ぎが速

いと評判の漚でさえなかなか縮まらない。

ようやく海面にたどり着いて、己の空腹を感じた時、丁度美味しそうなものが海面から顔を出しているのだ。単純な漚が食らいつけないわけが無い。

食らいついた時、口の中で何かが引つかかり、痛みが走ったのは言うまでもない。

漚は必死に抵抗した。頭の中で、これが噂の釣りなのか、と考える余裕も無かった。抵抗虚しく引き上げられ、水面を出してしまう事になった。

死んだな、あたし食べられるんだ。そんな事ばかりが頭を巡る。

漚を釣り上げたのは高校生らしい黒髪の男子だが、勿論漚は高校生なんてものは知らない。

「何だこれ、珍しい魚だな。」

「先輩、食えるんですかね、これ。」

先輩と呼ばれた男子は、金色の魚の漚をまじまじと見つめる。あたし食べれません、と訴えるように尾をバタバタさせていた漚は、その男子の顔をようやく見る事が出来た。

「先輩、珍しいもの程旨いつて言うし、食っちゃいます?」

「……いや、この魚、まだ小さいだろ? 離してやろうか。」

「そー言つて先輩、さっきからリリースばっかしてるじゃないスカ。魚にまで優しくしてどーすんですか。」

ああ余計な事を言うなもう一人、ああでもあたし助かるんだ…と安堵感から動くのを止める。

「こいつ、人語がわかるのか?」

見つめていたその男子が、離すと言った途端、抵抗を止めた魚を見て軽く驚く。

「何ていう魚かわかんけど、ちゃんと大きくなれよ。」

そう言われ、優しく海中に帰された漚は、一目散に深海に戻った。

初めての人間界は、危機だらけだったけど、初めて会った人間の優しい人だった。しかも良い顔をした男だったと漣は嬉しそうに笑う。

重ねて、写真の幸せそうな姉。人間はやはり良い人が多いんだろうか。今日出会った彼みたいなの。

「雪、あのね。」

例の洞窟。漣は雪を呼び出していた。

「どうしたの、そんな改まって。」

「あたし、人間界に行きます！」

そう打ち明け満足げな漣は、驚く雪を置いて向かった。人間になるために。

「待ってたよ…泡沫の娘。」

「あたしを知ってるのですか？」

泡沫漣の住む場所から少し泳いだ所に、行き着けの洞窟より深く怪しい洞窟がある。そこには魔女が住んでるとか住んでないとか、と誰もが噂を耳にした。

実際は、魔女というより薬屋の女が居るらしい。そして、そこに行けば人間になれる薬が貰えるというのだ。漣はすぐさま洞窟の薬屋の元へ向かった。

薬屋は長い黒髪に、体中を海藻で包んだ年増の女で、成程、魔女と言っのはあながち間違えてはいない。

「有名だからね、ほら、こつちきな、人間になりたいんだろ？」

恐る恐る、薬屋に近づく。薬屋は澪の手を取ると、小さな瓶を渡した。

「人間になる薬だよ。」

こいつを飲んだら魚になって海面を出て空気に触れると良い。そうしたら人間になれる。」

「怖そうな薬ですね。」

瓶の中で、黒と青の液が混ざり合い、非常に毒々しい。

「多少苦痛はあるが、人間になっちまえば普通に生活できる。ただ……。」

「ただ？」

「意中の人間と一年以内に結ばねければ、お前は海の泡になるよ。わかってるだろうがね。」

「わかってますわ。」

澪は小瓶を受け取ると、大急ぎで洞窟を去った。

「ねえ、もしかして代償ナシ？」

澪を見送る薬屋の側を泳ぐ黒光りする魚が問う。

「あの娘、最近の若者には珍しく古来からの人魚の本能的な面をよく受け継いでるね。」

「だから何さ。」

「心配なのだよ、あの娘は人間を知らな過ぎるからね。」

伏せ目がちだった視線を上げると、薬屋の眼前には黒い海藻のような髪を持つ人魚の青年が笑っていた。

「あの薬屋サンに珍しく情が湧いたのかい。やだなあ老けるって。」

「黙んなさい、宗^{そう}」

無邪気そうに笑う青年、宗を一喝すると、洞窟の最奥部に戻っていった。

「とうとう泡沫の澪も人間界か、静かになるねえ。」

そう呟く宗の表情は相変わらず笑っていたが、寂しさもかいま見えた。

「考え直しなさいよ。」

「嫌、絶対人間界に行きます。」

その日の夕方、やはりいつもの洞窟で、漑と雪は談笑していた。いや、ただの談笑ではない。

漑の「人間界に行く」という決心について、雪が問い詰めていた。

「絶対あの人の子供作るのです！」

「いやいやあんた、そんな本能的だったら人間界でやってけないわよ。」

「だってお兄様に習ってましわ！好きな相手には子供作りましょうって言う…。」

「だから人間界では通用しないからそれ！」

なにかと雪は人間界に詳しい。海に流された書物を読むことが趣味なのだ。

「大体人間界に行く理由が、少年漫画にありがちな主人公の戦う理由並に薄すぎ。」

「はい？」

漑が首を傾げるのも当然である。

「大体、宗さんはどうするの。求婚されたんじゃ…。」

「あの人は嫌いです！」

心底嫌そうに口を尖らせる漑の頭を、雪は優しく撫でた。

「もういい、止めない。その代わり、ちゃんと男捕まえなさいよ？泡になったら許さないんだから。」

「もちろんですわ。」

人魚には涙は無い。海で生きているのだから涙を流しても認識が

出来ない。だから涙というものの存在は知らない。

人間の書物が好きな雪は知っている。だから今微かに感じた熱いものが涙なのだろうか、雪はそう思った。

なんとなく、家族には黙って出ていこうと決めた漣。単純に人間界へ行きたい気持ちが強くて大切な家族を忘れてしまったのか、後ろめたかったからか。

皆寝静まった夜中、漣は住処を離れると、夕方来た洞窟の前に来た。

薬の瓶を開けようとすると、自分と呼ぶ声がした。

「おい、泡沫の漣。」

「何ですか？こんな夜中に。」

自分が人間界に行くことを知る筈の無い宗が居た。

「行くわけ？」

「はい。」

「へー。つか、よそよそしいなお前。」

手を伸ばして漣に触れようとすると宗。軽く避けると瓶を開いた。

「何であなたが来るのです！？私はあなたが嫌いなのに……！」

「じゃあ構わず行きやがれ。」

「行きますよ。私の意中の方はあなたなんかより優しくて笑顔が素敵な方です。」

瓶の薬を一気に飲み干すと、すぐさま金色の魚になった。

「おい……。」

宗が何か言うより早く、金色の魚は海面へと昇っていつてしまった。

先に海面へ向かった時より随分と長く感じた。月明かりが見え始めたころ、霧か目を瞑り速度を上げた。水を切り裂くように思い切り海面を飛び出し、人間界の空気に触れた。

「泡沫の娘に情があるのはお前なんだろう、宗。」

「大丈夫か？やっぱりあんた年取ったな。」

薬屋に毒を吐き、海面の方を見上げる。

「あの娘が上手くいくとは思えないんだがなあ。」

その日、その町に津波注意報が放たれたという。

その日、フェリーが沈没するという事故があったらしい。

その日、裸の少女がその町の海岸に流されたらしい。

1話：ガール・ミーツ・誰でも

鳴瀬瑞樹は荒れた海が好きだ。静かな海を見るより、心が落ち着く。なるせみずき

この日は、割と近くで沈没事故があったといので、海岸まで足を運んでいた。津波注意報はまだ解除されていなかったが、あまり気にしていないようだ。

黒い岩の群を渡り、海水と接するギリギリの所に立つと大きく息を吸う。生温い空気と潮の香りを感じると、遠くを見やった。

波が来そうだ。波に捕らわれて死ぬのなら本望だな、と一時期考えたことがある。今思えばただの思い出だ。

落ち着いている今なら波は危険だと理解出来る。なので下がって綺麗とは言えない砂浜に降りた。

しかし何も無かった。何も無いのは良いことなのだが瑞樹は満たされなかった。

静かな海なんてつまらない。荒れば良いのに。

飽きて立ち去ろうとした時、砂の色ではない、艶やかな肌色が視界に入った。近づいてみると、それは明らかに海藻に包まれた裸の少女で、僅かに肩が動いているのを見ると、生きてはいるようだ。

フェリーの事故に巻き込まれた一人だろうか。きつと風呂があつて、入っている時に事故が起きたんだろう。そう考えることにして、瑞樹は、少女の背中をつついた。

反応は無い。外傷は無く、呼吸も穏やかなので海水を飲んだ様子も無い。だとしたら何故…。

瑞樹は不思議がつて、今度は少女の頬を思い切り叩いた。すると、少女は目を開き、裸なのに恥ずかしげもなく素早く立ち上がった。流石に目のやり場に困り、目を逸らしながら後ずさりする瑞樹に、少女は言った。

「あの、黒くて短い癖毛の長身で笑顔が素敵な男性を見ませんでした？」

「……………はぁ？」

少女がよたよたと歩み寄り瑞樹の肩を掴むので、瑞樹は動けず少女を凝視した。

「いや、それだけじゃ誰かわかんないんだけど。大体、あんたフェリー事故に巻き込まれたんじゃないわけ？」

そう訊くが、少女は首をかしげる。

「何の事です？あたしは以前助けてくれた方を探しに人間の世界にやってきたのです。」

「はぁ……………」

「ああ離れないでくださいっ！あたしまだ上手く歩けなくって。」
足を震わせ瑞樹にしがみつくが、半裸の少女と密接しているという事実が、瑞樹を焦らせた。

「全く…歩くって本当に面倒なのですね！」

「おい…。」

「はい？」

瑞樹は少女を軽く突き飛ばした。柔らかい砂の上に転がる少女に、持っていたスポーツバッグの中身をぶちまける。

「タオルで体拭いて服着な。」

「ええっ！こんな窮屈そうなものを身に付けなくてはいけないのですか！？」

さつきから何を言っているんだ。まるで自分が人間である事を忘れたかのように。事故のショックか、そう瑞樹は考えることにした。
「…いいからさっさとしろ。着たら探し人について教えてやるよ。」
「本当に！？」

目を輝かせて少女がいそいそと身に付けたものは、瑞樹の通う高校のセーラー服だった。

「さて、あたしの探し人について何か教えてくださいね！」

瑞樹は迷う。黒髪の癖毛の長身は居るといえば居るのだが、この

少女が言った事だけじゃ手がかりが少ない。こんな変態、放置しておけば良かったと瑞樹は後悔した。

「わかった、わかったけどあんたどこの人？親御さんは？」

取り敢えず素性がわからなければ話にならない。

「親には黙ってここに来ました！」

「家出か…。どこから？」

「勿論海の中からです！あたしは人魚ですから！」

やはり事故のショックで頭がどうなったのだろう。瑞樹は自分を無理矢理納得させた。

「冗談はそれまでだ。」

「信じてくれないんですね…。」

「当たり前だろ！いきなり人魚と言われて信じる奴なんて居ねーよ！」

証拠もねーのに、とむくれる少女に詰め寄る。

「あたしが上手く歩けないのが何よりの証拠です！」

「だから怪我したんだろ事故で。」

「事故なんて知りません！」

「いーや、あんたは事故に遭った、そのショックで記憶がおかしくなった。そうしか考えられねー。」

瑞樹はしゃがんで少女に背中を向ける。

「だから一回ウチに來い。目立った外傷は見えないし、今病院に行ったら確実にパニックになる！」

少女は大人しくおぶられるが、思い出したように背中を叩いた。

「あの、探し人は…？」

「だから、ウチに居るの。」

瑞樹は、お人好しな自分を呪いながら、自宅に向かった。

人間の家ってこんなものですね！想像してたものより随分小さいものです。

あたしが海岸で出会った人間はどうやら愛しの探し人を知っているようです。人魚だと信じてくれませんでした。

さてその人間は鳴瀬瑞樹というようで。人間、特にあたしの住む日本の人間といえば、肌は黄色く背も鼻も低く、足は短くあまり良い容姿ではないと雪から聞いていました。

しかし、鳴瀬瑞樹さんは白い肌に整った顔立ち、背は高くはありませんが足が長く、実に綺麗な方です。金色の短めの髪がよく似合います。本当に日本人なのでしょうか。

「ここで待つておきな。」

そんな容姿の割には乱暴な物言いをするのが残念というか…。

あたしはお風呂というものに入られ、何やらふかふかしたものに座られ、何が来るのやらと待つています。そして今来ているものは…ワンピースというものでしたか、可愛らしい花柄の布で出来たものです。

目の前にはテーブル、その上にコーヒーが注がれたコップ。雪が色々教えてくれていたおかげで物の名前には苦労せずに済みそうです。

しかし不思議です。人間はあたし達と同じく家族と暮らすと聞きました。でもこの家、今みただけでも5人位の幼い子供がいました。大家族なのでしょう。人間も子作りには積極的なのですね！

「こんにちは。丁度クッキー焼いたから食べる？」

現れたのはあたしより年上らしき女の人です。クッキーというお菓子を入れた器を差し出されました。お姉様が焼き方を覚えたと手紙に書いていましたが、美味しいのでしょうか。

「口に合うと良いんだけど。」

人間界に美人は居ないと雪は言っていました、この方は人間界

では美人の部類なのでしょう。あと胸が大きいです。身長は雪位ですね。

彼女からクッキーを受け取り一口頂きます。サクツとしていてほんのり甘い、茶色い小魚の糞のような粒が付いていますが美味しいですね。

「もしかして、瑞樹さんのお姉様ですか？」

兄弟は似るものだと聞いていますが、この方は瑞樹さんに似ていません。

「まあ姉みたいなものだし一緒に暮らしているけど、血は繋がっていないの。」

「そうですか…。」

不思議です。一緒に暮らすのは家族だからだと思っていました。何やら不思議なことばかりです。少し不安になってきましたよ。

「ね、名前何て言うの？」

「泡沫沫です。」

「零ちゃんね、瑞樹から聞いたんだけど、事故に巻き込まれたんだって？」

あ、やはり瑞樹さんは信じてくれていないようですね。

「それは瑞樹さんの勘違いです。あたしは海から来た人魚ですから。」

「うーん、そう言われてもねえ…。」

お姉さんは困ったように笑うだけです。信じてくれたのか否か、まあ信じてくれたわけではなさそうですが。

あたし達からすれば人間こそ信じられない生き物なのです。おかしな二本の足で歩き、海では泳げはするものの溺れたら死んでしまう。あたし達の仲間である魚達をむやみに捕まえ殺そうともします。ああ全く理解できません。

「全く…ひい姉にまで変な事言わないでよ。」

沈黙を破るように現れたのは瑞樹…さんでしょうか。

瑞樹さんかどうか少し迷ったのは、雰囲気違ったからです。美

しい顔立ちは相変わらずですが。

人魚の世界と同様、人間の性別は見たらすぐわかるとお姉様が言っていました。瑞樹さんはそれでわからないのです。先程は男性の服を着ていたので男子と判断しましたが、今瑞樹さんはあたしが着せられたような服を身に付けています。

「瑞樹：流石に初対面の人にそこ格好はマズいんじゃないの？」

「べついいじゃんかー。つーかさ、こいつ人探してるらしいんだけど。」

そうでした。本来の目的を忘れてはいけません。

「人探し？」

「はい！あの、あたし海である男性に助けられまして。」

取りあえず事の経緯を話してみました。反応がいまいちです。

「…やっぱ事故で海に溺れてて流されたのを助けられたとか。」

「そう考えた方がしっくり来るわね…。」

やはり一回引いてみるしかなさそうです。ならば…

「そうだとでも瑞樹さん？あたしの探し人を知っていると言いましたよね？会わせてくれると。」

「まあ確かに、黒髪の短髪で癖毛のやけに人助けする馬鹿みたいにお人好しで面が女子受けの良い人ならこの家の者だけど？でもやっぱり見た目の情報だけじゃ…。」

時計を見たお姉さまが「あいつ、帰ってくるの遅いわよ。」とあたしに微笑みました。

「ちよつとひい姉、まともに取り合うつもり？」

「いいじゃないの。でもそのかわり、あなたが本当に事故に巻き込まれたのではないのかこの大人に問い合わせてもらうから。」

「む…良いですけど…。」

じゃあ瑞樹頼んどいて、と背中をおすお姉さま。瑞樹さんは面倒くさそうにどこかに向かいました。結局性別を訊き忘れてしまいました。したが後々わかるでしょう。

お姉さま（名前を訊くのを忘れました）にお茶を飲みながら待つように言われて一時間経ちましたが、まだ探し人は現れないようです。

しかし、この家には興味深いものが多いですね。テレビ…確か箱に人が映し出されるもの。ラジオ…箱から声が聴こえるもの。立って色々調べたいのですが…まだ上手くあるけないのが悔やまれます。でもずっとこうしているのは退屈です。歩く練習も兼ねて少し家を探しましょう。

ずっと居た部屋を出ると階段を見つけました。お姉様が、階段に苦労したと手紙に書いていました。超えなければならぬ壁のようです。

手すりを掴みながら一段ずつ踏みしめるように登りますが…なかなか面倒です。人間って凄いんですね。

登り終えた頃にはもう限界でした。すぐ目の前にあった部屋に倒れこむように入ると、フワフワしたものを全身で感じました。ベッドというものです。

海では感じないフワフワとした感触、人間って良いですね…。

ところでこの部屋はどなたの部屋なのでしょう。何やら分厚い書物が並んだ殺風景な部屋です。一応、人間界の言葉を教えてくれる人は居ましたので、日本語と英語は理解出来るのですが、書物の背表紙には何やら難しいそうな事ばかり書いてありそうです。

部屋の主は勉強熱心な方の部屋なのでしょう…おや？ 物音がしますね。物音というより足音でしょうか。段々近づいてきます。伊達に海の中で生き延びていませんから、生物が近づいてくるのは敏感に反応出来るのです。

この部屋の扉が開いて現れたのは、長身の黒髪で癖毛の男の方で

す……あ。

「……………見つけました！」

「うわ。」

あたしが探していた方です！精悍な顔立ちも声も全く助けてくれた方と同じです！

「びつくりしたな、もしかして瑞樹が連れて来たっていう子か？」

「はい！泡沫濤と申します。貴方を探しに参りました。」

「そうらしいな。俺は君に覚えは無いんだけど。」

そうでした、この方に助けられた時はあたしは魚の姿でした。

「あの、あたしは貴方に釣り上げられて、でも海に返してくれたんです。」

「えっと、何言ってるかよくわからないんだが。」

「貴方に助けられたその時、あたしは……」

「こんな所にいたのかお前っ！」

瑞樹さんが息を荒くしてあたしの前に塞がりました。

「瑞樹さん、邪魔です。」

「俊兄が困ってんじゃないか！」

むむ、やはり瑞樹さんは女の方で、このあたしの恋しい方に気があるのでは。恋敵というやつですね！

「瑞樹さん、確かに貴方は美しい容姿ですよ……。でもあたしがこの方と結ばれたいと望んでいるのです。邪魔しないでください。」

「いや、何言ってるんのさ。意味わかんないんだけど。」

「しらはつくれたって無駄です！」

まだ慣れない足ですが、頑張って立ちました。瑞樹さんを見上げると、彼女の綺麗な目が泳いでいるのがわかります。

「俊兄、こいつどうしよう。」

「瑞樹、取りあえず話を聞いて欲しいみたいだな。」

「下がってけっか。仕方ないなあ。」

引き下がりましたよ。あたしの迫力に押し負けました、ざまあみやがれですよ！人の恋路を邪魔するんだから。

「で、つまり君は何を言いたいんだ？」

瑞樹さんが下がったので、目の前には「俊兄」と呼ばれていた彼。緊張してきましたよ…。

大丈夫です。ここで、あれを言えば良いのですねお兄様！

「あの！」

「ん？」

「あたしと…子作りしてください！」

言えた！達成感で満たされるあたしです。瑞樹と俊兄様は酷く驚いています。そうでしょうね。誰でも、愛の告白を受けたらびっくりすると、雪が教えてくれましたから。

2話：常識ですから

突然だが、俊兄は女性経験がない。女子にはモテるし彼女を作ろうと思えば作れるけど、俊兄はいわゆる、彼女居ない歴〃年齢な奴だ。真面目なんだ。真面目だからマジで結婚するまでやらないとか考えてそうだ。

この女のように、俊兄に言い寄ってくる女は今まで沢山いた。でもこの女は何か違う。何が違うんだ。

「何も隔離する事ないじゃないですか…。」

泡沫濤が衝撃的な事を言った後、俺はすぐさまこいつを俊兄から離れた。今はひい姉の部屋に居る。

「お前がいきなり性行為迫るからだろうが！」

「せーこーい？何です？それは。」

「セックスだ馬鹿！」

「女子の前でストレートに言うの止めなさよ。」

ひい姉が居るのをすっかり忘れていた。頭を叩かれて、ひい姉が居辛そうにしているのに気付く。

「それに瑞樹、この子事故の影響でちょっとおかしくなってるかもしれないじゃない？」

「これはもう事故関係ねーだろ！」

「だから事故なんて知らないんですってばあ…。大体瑞樹さん、貴方が俊兄様を好きだから邪魔してるんじゃないんですか？」

どうしてそうなる。

「あんな、俺男だからね？」

「え、だって見た目が…。」

マジで女と思っていたのか。

「だから瑞樹、女装はやめなさいって。」

「だって、自分の裸を見たのが男だって思ったら嫌だろ！？」

気を遣ってんだよ俺も！それに…。

「それに今日は女装しないんじゃないの。」

急に真面目な顔になるひい姉。

「事情が変わったんだよ。」

おざなりに答えたが、俺だってこんな日に女装なんてしたくはなかった。

「よーてめーら、問い合わせてきたぜ。」

ダルそうに入ってきたのは、この家の主、紫原丈一郎だ。若いのにアパートの管理人でその家賃収入で俺らを養っているが、どんだけ金持ちなんだ。ボサボサ無造作頭と安物の服からは想像出来ない位、資産家の息子でもある。

「ジョー兄。で、結局こいつは事故に関係…。」

「無い、以上。」

俺は寝る、と部屋を出る。

「まてまてまてまてまてまて！じゃあこいつ何！？」

「だから人魚ですって。帰る所は御座いません。」

マジかよ…人魚かはともかく、マジで身元不明かよ…。

「ちょうど良いじゃない、帰る所がわかるまでここ居れば。」

「ひい姉！」

「だってここ、『色彩荘』には訳ありしか居ないじゃないの。」

ひい姉が言うのは最もで、俺もひい姉も俊兄も、ここに住む学生は全員親が居なかったり訳あって離れて暮らしてたりの中だ。ジョー兄の財力で、俺達はなんとか暮らしている。施設とは少し違うが、似たようなものだ。学生宿舎で通っているようだが。

「ジョー兄と話した時も、もしもの場合はそのつもりだって言うてたしね。」

マジかよ。つかひい姉ノリノリじゃないか。

「よろしくね澪ちゃん！私は赤坂飛鶴。」

「よろしくお願いします…。」

「俊とは同じ年で瑞樹は一つ下ね。あ、俊のこと好きなんでしょ？任せた任せた！」

マジだなひい姉。こいつの恋愛を応援するのか。

「今から俊の所行く？」

「え、あっはい！」

ひい姉は泡沫の腕を取り、意気揚々と俊兄の部屋に向かう。

これはマズい、色々と。

「というわけで、ここに住む事になったから、漣ちゃん。」

「よろしくお願いします…！」

再び俊兄様の部屋。俊兄様は勉強をしていたようです。

「そうかー、よろしくな。」

「何よー、あんたこの子に好かれてるんだからね。彼女にしなよ彼女に。」

「気持ち嬉しいが。」

あたしに向き直り、真剣な顔で言う。

「俺は彼女作ってる余裕は無いし、欲しいとも思わないから悪いけど…。」

「彼女？子どもを作るんですよ？」

瑞樹さんが言った性行為をすれば良いと思うのですが…。

苦笑いするひい姉様と、ため息をつく俊兄様。やはり人間界では違うのでしょうか…。

「あ、私、宿題するから帰るね。」

気まずそうに部屋を去ろうとするひい姉様の手を、俊兄様は掴みました。

「待てよ飛鶴、俺はこんな…。」

「頑張ってね！」

ニッコリと笑って華麗に離れるひい姉様。

「参ったな。…君ももう夜だし取りあえず寝たら…。」

人間が寝る時って、こうするんでしたっけ。

ワンピースを脱ごうとしたあたしの手は、俊兄様にがっしりと掴まれました。

「寝る、ってそういう意味じゃないぞ。」

「人間が寝る時はこうすると、兄に教わりました。」

「人間が…?」

「あたしは人魚なんです。」

俊兄様が離れると、少し握られた感触の残る手で、ワンピースを脱ぎました。

「誰も信じてくれませんが、本当に人魚なんです。金の魚の姿で貴方に釣られ、情けをかけて頂きました。」

「金の…魚…。」

「本当はこんな窮屈な服を着たくはないです。こんな足も要らない。ただ貴方に会いたかったから、来たんです。」

下着も外すと、本来のあたしの姿です。今まで服に縛られていたので、少し違和感を感じますが。

「金の魚には覚えがある。」

俊兄様は、あたしの目をずっと見て言いました。

「好きにすれば良い。俺は君の言う事を疑うつもりは無い。」

数秒後、視線を逸らすと再び机に向かい、勉強を始めました。

「零ちゃんの転入の手続きしてきたぜ。」

「早いよジョー兄。つか漣いくつ？」

「16です。誕生日は夏です。」

「そうだ、瑞樹と同じ学年だぞ。」

明日から新学期だ。二年になる俺はどうやら漣と登校するハメになりそうだ。

一個上である俊兄をチラリと見る。

漣は裸で俊兄の部屋で寝ていたらしい。俊兄は放置してたらしいが。

「何見てるんだ、瑞樹。」

味噌汁を飲む俊兄はいつも通りだ。

「別に。」

「そうか。しかし飛鶴、今日の朝飯はいつにも増して凝ってるな。」

ここの炊事洗濯は全てひい姉の仕事だ。

「でしょ、漣ちゃんに食べて欲しくて。美味しい？」

「美味しい。」

同年代から見えて大人っぽい二人は新婚夫婦のような会話を交わす。

俊兄はひい姉の作る料理が好きだ。こうしてよく誉める。

「というか、俊兄はひい姉が好きだ。」

「漣ちゃん、どう？」

「美味しいです！味噌汁初めて食べました！」

「良かったあー。」

そう言つて微笑むひい姉を見ている俊兄を俺は見逃さない。俊兄は考えてる事がわかりにくいけど、こればかりはわかる。

ただしひい姉は、全く俊兄に気がない。本人の口がそう言つたし、ひい姉がわかりやすいから確かにそうなんだろう。

だからひい姉が漣を応援するのは当然だ。まあでも俊兄が哀れだ。仕方ないけど。

「ねえ、明日から学校始まるしみんなで出掛けない？俊はお墓参り行つてないでしょ？」

「そうだな。でも丈兄、今日中学生組が実家から帰ってくるんじゃ。」

それに一人で世話出来るのか。」

「行つてこい行つてこい。チビらは中学生共に任せるわ。」

ここには俺らの他に中学生が2人か、今横に並んでいる幼児から小学校低学年ぐらいの子が5人居る。

「じゃあ決まりね！お墓参り行つて、漣ちゃんに街案内しましょつか！」

あたし達人魚の仲間が死んだ時、特に葬る事は無かったのですが、人間界ではお墓に埋葬されるそうです。今あたしの目の前には、同じ形をした石が並んでいる光景が広がっています。みなさんに着いていくと、ある所で止まりました。そこには…

「鳴瀬…家の…墓？」

「俺んちの。」

成る程、瑞樹さんのご家族が眠つてらっしゃるんですね。

「昨日、俺の姉貴の命日だったの。」

瑞樹さんは、寂しさとか切なさとか、形容し難い表情で笑うと、静かに手を合わせました。ひい姉様も俊兄様もそれに習います。あたしも見よう見真似に手を合わせました。

「漣ちゃんはご家族は？」

墓地から少し歩いた所でひい姉様に訊かれました。

「両親と兄と姉が居ます。」

「お前家族は大丈夫なわけ？」

瑞樹さんの中では家出したようになってるんですけど。

「大丈夫…じゃないでしょうか。」

そういえば、姉は人間界に居るのですから会おうと思えば会える

かもしれません。それでも、会いたいという気持ちが起きないので

「何があつたのかは知らないけど、連絡とれるなら取った方が良くない？寂しくない？家族と離れて。」

「よく…わからないです。」

「わからないって…。」

ひい姉様は不思議そうにしますが、わからないものはわからないのです。

人間は家族だから会いたいと思うのでしょうか。ただあたしがかしいのでしょうか。

安いからたまに来ている、海を一望できるレストラン。泡沫漣と会った海岸のそばだ。ひい姉と俊兄が食事をしている中、何かを食べる気になれなくて、テトラポットに座って海を眺めていた。テトラポットに立ったり座ったりするのは危険だけど、落ちたらそれはそれで良い。

というか、本当に静かな海だな。一年前の昨日とは大違いだ。

「瑞樹さん！ご飯食べないのって俊兄様が…。」

泡沫漣がテトラポットを軽々と渡りながらやって来た。

「お前…あぶねーな！」

「何してるんですか？昨日もそうやって、海を眺めてましたよね？」
よく覚えてんなこいつ。

「俺は姉貴に会いたいね。」

「はあ…。」

「お前さ、何で来たわけ？」

愚問だろう。こいつは俊兄に会いに来た。問題なのはそこじゃない。こいつは姉貴が死んだ日に、姉貴が死んだ海で現れた。

偶然だったのはわかってる。こいつは関係ない。でも…

「お前、鳴瀬愛海じゃないよな？」

次の瞬間、静かだった海に立った突然の波に、不意に立ち上がった俺の足は飲まれていった。

俺は荒れた海が好きだ。荒れた海で死んだ姉貴に会えるかもしれない。見つかるかもしれない。

静かな海は嫌いだ。姉貴が海に居るという事実を否定しているように。

俺はどうなるんだろう。溺れたまま死ぬのか。それなら本望だ。

「瑞樹さん！」

泡沫濤の音がする。海中なのに、確かにあいつの声と、掴まれた手の滑りとした肌触りを感じた。

何なんだこいつは、そう考える暇もなく、海上に引き上げられた。

人間は海中では呼吸が出来ません。人間になったあたしも出来るわけがありません。なのになぜ、瑞樹さんを助けた時に呼吸が出来たのでしょうか。人魚の時のように泳げたのでしょうか。

「瑞樹を助けてくれてありがとな。」

引き上げられた瑞樹さんは俊兄様の手当てのおかげで無事でした。もう眠ってしまったようですね。

「そっぴや瑞樹さんに、鳴瀬愛海さんかどうかつて訊かれたんですけど。」

「やはり、重ねたんだろうな、お前と愛海姉さんを。」

俊兄様によると、愛海さんは瑞樹さんの亡くなったお姉様。あたしがここに来た日が命日で、あたしが暮らしていた海で溺れて死んだそうです。

「あたしが家族に会いたくないのか訊かれてわからないって言った事…どう思ったのでしょうか。」

なにかとても悪い事を言ったように思えます。

「人魚のあたしには、人間に必要な心が無いのでしょうか。」

「心が無かったら、そんな事は思わないし、瑞樹を助けないだろ。」机に向かっていた俊兄様は、こちらに体を向けました。

「きつと何かが欠けてるだけだ。大丈夫。いろいろ経験して感じる事があればきつと…。」

俊兄様が余りに優しく言うものですから、思わず抱きついてしまいました。

欠けているなら満たせば良い、という事でしょう。今何か、満たされたように思います。

朝目覚めた時には、瑞樹さんはすっかり元気になっていました。すれ違い様に、呼びかけられました。

「礼、言っとく。」

物言いは相変わらず乱暴ですが、良しとしましょう。

「あとお前、本当に人魚らしいな。」

「信じてくれるんですね!」

「あつた事を受け入れたただだし。」

こついつのを、素直じゃない、と言つのですね。

「そついや瑞樹さん。」

「何だよもう...。」

「あたしは愛海さんじゃないですよ。」

「わかつてる。悪かつた。」

急に素直になりましたか。

瑞樹さんの事、まだよく理解できません。でも理解出来る心を持ちたいです。大丈夫です、今、優しさで満たされてますから。

3話：名前って肝心です

「おつす瑞樹！今年も同じクラスだな！」

「鳴瀬えー、今日は女装じゃないわけー？ってその子誰？」

「うおーい、鳴瀬が彼女作つたらしいぞ！」

「マジかマジか！うわマジ奇跡！」

「だーかーらー」。

同級生と挨拶を交わす度に事情を説明しなくてはならない。俺を助けてくれ。

そもそも、なぜ漑をわざわざ学校に通わす事にしたのか。

「だって、俺この子の面倒一人で見切れんよ？それに一人で家に居たって退屈だろーが。」

ジョー兄こと紫原丈一郎曰わく、そういう割と適当な理由らしい。しかも漑め、転入の時受けるらしいテストを軽々と突破したらしいから、一度は信じたが、人魚かどうか疑わしくなってきたぜ。

つか事の流れが良すぎて、ジョー兄の奴、金使ったんじゃない？とか真面目に思っていたりする。

さてそんな俺は晴れて高二だ。漑も年齢的に高二でしかも同じクラスらしいから、一緒に居る羽目になる。ああ本当に鬱陶しいんだぜ。

「瑞樹さん、沢山の人に挨拶されましたが、有名なんですね！あたしと同じです！」

急に目を輝かせて何を言うかと思えばそんな事か。

「ふん、これでも多少顔は広いんだよ。」

と言っておく事にした。

転入生扱いの漑は校長室へ行き、ようやく一人になれた俺は新しいクラスに向かう。

俺の席は漑と近かった。一人を挟んでいたからそいつを知ってたから絡ませてやろうとか考えたけど、知らない奴だった。

「新城…まひ…ろ？」

女子っぽい名前だし、まあ女子だろうな。なら心配ない。漑と仲良くやってくれよ。そしたら俺も楽になれる。彼女みたいに見られたらたまったもんじゃない。

なんて考えてたら、その席の持ち主が現れ、ドカツと座った。

短髪を部分的に茶色に染めた、長身で体格の良いちよつと壊そうな…男子だ。

何だよ…名前合わなくないか？まひろって面じゃないだろ。百歩譲って男子の名前だとしても、こんな強面の奴にまひろは合わん。つか何？こいつが隣なの？俺顔広いけど不良は対象外だよ？

「何見てんだ？」

新城^{まひろ}眞宏が頬杖をつき、だるそうにこっちを見て言った。うわ、結構見てたのがバレたか。

「…別に。」

内心焦りつつ顔を逸らすと、向こうも案外気にしていないようで、特に何も返されなかった。

「泡沫漑です！宜しく願いします！」

先生に案内されて教室に入り自己紹介をする漑。人魚とか言うな、

と念入りに言つたのを覚えていたようだ。

「泡沫つて珍しい名前だな。」

「つか可愛くね？」

転校生が可愛いなんてありがちな話だが、事実漣は垢抜けているのかもしれないが。まあひい姉が結つたツインテールのおかげだきつとそうだ。

「ちよつと男子いー、須波さんより可愛いんじゃないの？」

「つか須波さん可愛くねーし。」

女子の笑い声と、俺の斜め後ろで俯くちっさい女子。須波といや女子にえらい嫌われてるので有名だ。まあ俺には関係ない。

担任の咳払いて笑い声は止んだ。

「泡沫は新城の隣か。鳴瀬ー、あとは宜しくなー。」

クラス中がクスクスと笑う中、漣め、「瑞樹さーん！」って手を振つたもんだからたまつたもんじゃない。

そして何故、沢山あるクラスの中から、俺の居るクラスに選ばれたのか。

「だつてあの学校、俺んち関係だろ？」

午前中で学校が終わつたので、帰ってジョー兄に問い詰めてみた。

「そついやそうだっけ。」

「忘れてんじゃねーよ、誰のお陰で学校行けてると思つてんだ。」

制服も古いし校舎も綺麗ではないが一応私立だ。ジョー兄の親父の弟が理事長で、金銭面でも融通が利くから、保護者が居ない学生でも通えるわけだ。

「で、漣の入学の件も、融通利かせたわけか。」

「でも試験は一応受けさせた。澪ちゃんが頭良いのは本当なの。」
国語と英語が良くてそれ以外がからきしだったらしい。

「だから必然的に文系のお前のクラスになるわけだな。」

「というわけで宜しく願います！」

相変わらず呑気な澪、こいつ自分の立場わかってんのか？

「まあこいつが帰るまでだし我慢するか。」

だから早く身元がわかってくれ。

「何言ってるんです瑞樹さん。あたしは俊兄様と…。」

「そうだぞ瑞樹。俊の奴、今まで浮いた話一つも無かったから丁度良いとは思わんか？」

「そついう問題じゃないわ！」

本当ジョー兄適当だな。ひい姉にしてもそうだが、何で得体の知れない澪に協力しようとするんだ。

「まあそうカリカリすんな瑞樹。」

「してねえよ！」

「瑞樹さん、何処に行くんです？」

「お前には関係ないだろう。」

駄目だ、こいつらのペースに巻き込まれて落ち着いて話が出来ない。

リビングを出ると、買い物帰りのひい姉とバツタリ合った。

「あ、瑞樹い、澪ちゃんに服何枚か買ってきたんだけど、どうかな？」

「楽しそうだな。」

澪が来てから、ひい姉がまた一段と明るい気がする。

「つか服なら貸すのに。」

俺が女装で着る姉貴の服だが。

「…愛海さんのは澪ちゃんには似合わないんじゃない？なんなら俊の好みでも訊いてくるかな。」

ひい姉は鈍感だから、また地雷を踏もうとする。

「俊ーあんたまた勉強してんの？」

部屋に入ると、やはり机に向かう俊兄の姿があった。

「お前も三年なんだから勉強しろよ飛鶴。」

「はいはい。」

軽く受け流すひい姉も、因みに俺もあまり勉強が得意ではない。

「てぎ、澪ちゃんに服買ってきたんだけど、あんたはどれが良い？」

と、服を床に並べるひい姉。

「何で俺に訊くんだよ。」

もつともだ。俊兄は苦笑しながらも服を手取る。

「何でも良くないか？」

「ばーか。だからあんたモテないの。」

いや実際モテるぞ俊兄。

「大体、この服全部飛鶴が澪に選んだんだろ。」

「まあそうだけどさ……やっぱ好きな人が好むのを着たいじゃない？」

「だったら、俺はお前が好んで選んだのなら何でも良い。」

一瞬の沈黙、ひい姉は何と返したら良いかわからない様子だ。俺

は俊兄が言いたい事わかったけどね。

「ああ、そんなに私のセンスが良いんだね！」

違う、ひい姉違う。

「……………そうだな。」

「ありがとう！夜まで勉強するなら飲み物持ってきてあげるから。」

上機嫌で部屋を出たひい姉を、俊兄はまた苦笑しながら見送る。

「良いわけ？俊兄、澪にその気全く無さそうに見えるけど。」

「そうだな、だからちゃんと言うつもりだ。」

振る時はハッキリ振るのが俊兄のやり方らしい。

「やっぱり勉強に集中したいから？」

それだけじゃないのは分かってるけど、国公立の医大を目指しているという俊兄は、勉強量も伊達じゃない。

「まあな。」

「彼氏欲しいとか言ってるひい姉とは大違いだな。進路もずっとここで働くとか言いそうだし。」

反応を見る。が、特に無し。つまらないな。

俊兄をいじるなんて俺には無理だな、と諦めて出ようとしたら、呼び止められた。

「瑞樹。気付いてるなら言えればいい。」

顔色一つ変えずにそう言っ、机に向かう俊兄。適わないな本当に。

「つまり、席が近い人に話しかければ良いんですね！」

「つーことで、頑張ってくれよ。」

新学期二日目。登校中に学校でまわりつかれるのが嫌なのでその教えておいたが。

「楽しみです！雪みたいな友達、また作りたいです！」

「あ、でも隣の奴には話しかけるなよ…ってもう居ないし！」

あいつ学校の場所がわかるのかよ、と思ったが、記憶力良いみたいだし大丈夫だろう。

学校に着いて教室に入ろうとした時、クラスメートに声をかけられた。

「瑞樹！お前例の子と一緒にじゃなかったのかよ！」

「別に…なんだよそんなに慌てて。」

石原という割と仲の良い普通の男子が、教室の中を指差す。

「泡沫さんが、新城に話しかけてただけ…！」

あれか、隣の怖そうな奴か。

「あいつ、やっぱヤバいの？」

「良い噂ねーぞ？家が極道とか、芦屋商業の頭をフルボッコとか！元剣道部だけど、先輩全員を倒して退部して、目をつけられてるの

は有名だぜ！」

何だこの漫画にありがちな噂は。まあ石原がビビりでヘタレだから多少大げさにしていそうだけど。

「家は飲み屋さんだよー。あとは事実らしいけど。」

笑いながら話に加わった小柄な加藤は、どうやら新城と同じ中学らしい。

「オレ、あいつの事よく知らないけど、瑞樹は関わるべきじゃないよ。」

加藤はヘラヘラ笑いながら教室に入る。それに続くと、新城の机に手を付いて、笑顔で話す澪の姿が目に入った。そんな澪を、新城は腕を組み、じっと見ている。

「隣の席ですから、友達になりましたよう！」

「……………」

「さああなたの事も教えてくださいな！」

「この、どアホが！」

俺は澪の腕を引っ張り教室の外に連れ出した。

「何するんですか！」

「あいつは止めておけ。そしてお前は人間を選ぶ注意力を持て。」

「何ですか？ ついでに瑞樹さんも友達になれば良いじゃないですか！」

こいつ、「瑞樹さんとも仲良くしてください」とかマジで言いそうだ。

「それは断る！ つか本当にあいつは駄目だ！」

「嫉妬なんて醜いですよ瑞樹さん！」

「違うわボケ！」

駄目だこいつ。こうなったらもう知るか。構つてると疲れそうだ。わかった。好きにしろよ。俺を巻き込むんじゃないぞ。」

「じゃあ呼んできますねー。」

話聞いてたこいつ！？

止める間もなく駆け出そうとした澪の前に、デカイ図体が立ち

だかる。教室の入り口を塞いでいたのは新城だった。

「何の用だよ……！」

「泡沫さん、組章落ちてたのあんたのдар。」

差し出された手にはクラスごとにあるバッジだ。漣の胸に付いてるハズのものだ。

「ああ！それ上手くとめられなくて！ありがとうございます！」

バッジを受け取り付けようとするが、こいつこんなに不器用だったのか。なかなか付けられない。すると見かねた新城が手をだした。漣からバッジを自然に受け取ると、（漣と比べると）器用に付けた。鮮やかな一連の流れに、俺は突っ込むのを忘れてしまった。

「ありがとうございます！ほらあやっぱり良い方じゃないですか瑞樹さん！友達になりましたようよお！」

「友達ねえ。別に良いけど。」

新城が苦笑しながら言う。

「はい！新城さんは友達です！瑞樹さんも仲良くしましょう！」

新城が俺を見る。ビビってると思われたくはないから、精一杯睨み返して言った。

「おっおまっお前、漣に余計な事してみろ！ここ殺すかな！」

「瑞樹さん、声震えてません？」

ビビっているわけではないがな。それはともかく、これじゃまるで……

「別に彼女とかじゃないからな！漣には決めてる男が居るんだよ！」

「なあ泡沫さん、こいつ何言ってるの？」

「さっぱりです。瑞樹さん今ちょっとおかしいんですよ。あなたと仲良くするのは駄目だとか言い張ったり。」

それを言うな馬鹿！

「友達は選べって事だ。」

わかってるならどっか行けよ新城。俺は交友関係は広いが不良だけは仲良くなりたくないんだ。

「そんなのおかしいです……。席近い人とは仲良くしろと瑞樹さん言

つてたじゃないですか！」

「でも時と場合によつてつてのがあつてだな……。」

説明しようとしたが、やはり耳を貸すわけが無く、

「瑞樹さんの嘘付き！嘘付きなんて大っ嫌いですっ！」

と吐き捨ててどこかに行つてしまった。放つておこうと思つたが、新城に肩をつかまれた。

「探さないのか？」

「お前関係ないじゃん。」

というか関わらないで欲しいんだけど。

「俺と仲良くしてやると言つてくれた奴だ、関係ないわけがないだろうが。」

俺を軽く突き放すと、探しに行こうとする新城。

「ちよっ……待てよ！」

俺は反射的に、新城を追つていた。

「なんだ、心配なのか？」

「勘違いすんな！あの女に変な事されたら困るだけだ。」

そうだ、あいつは常識知らずだから何するかわからない。

少し探すと、やはり不安は的中していた。

「てめーからぶつかつてきたんだろ？。ああ？」

「何をおっしゃいます？あたしは普通に歩いてました。ぶつかったのはあなた達の不注意のせいです。」

澪は三人の柄の悪い三年に絡まれていた。ありがちな、ぶつかったから謝れ、という奴だ。

柄の悪い奴嫌いなんだよなあ。どうすべきか迷っていたら、新城が行動を起こしていた。

「女子を数人で囲んで、卑怯だとは思わんのか。」

そういう新城は……全然格好良くない。何やってんのこいつ馬鹿か？騒ぎが大きくなるだけじゃねえか。

「お、お前新城じゃねえか……。」

「久々だなあ、お前から喧嘩売つてくるとは思わなかったぜ。」

「以前の借りはキツチリ返してやるよ。」

大事になりそうだ。新城と揉めた先輩かよ。この三年達も馬鹿だろ。本当不良って奴は…。

まあいい、三年の事は新城が勝手にやってくれるから、漑を連れておいとまするか。

「おい馬鹿女、喧嘩始まるから逃げるぞ。」

三年に気づかれないよう漑を呼んだが、三年に気づかれたようだ。こちらを見て驚いている。

「おい馬鹿！こいつ鳴瀬瑞樹じゃねえか！」

「新城も女も鳴瀬のツレか？」

「やってしまった…！」

連中の反応で思い出した。俺は守られてたんだ。

あたふたする三年三人の背後から、その反応の原因となる人物が現れた。

「お前ら何やってんだ？」

「くく黒島！」

「違う、別に何もしてねーぞ！」

腕を組んで三人を見る俊兄と、イタズラがバレた子供のような三年三人。

そうだ、ついつい忘れそうになるが、俊兄は真面目で大人しそうだが、訳あって、割と多くいる三年不良が逆らえない存在なのだ。

「何があった？」

「その女とぶつかって揉めて…。女が謝んねえから…。」

「謝れよ。どうせお前かららぶつかつたんだろ？」

「……べ、別にそういうわけじゃ…いや、そうなんだろうけど…。」

「ハッキリしろよ。ん？」

口調は普通なんだけど、やはり学校での俊兄は怖い。学ランに中の黒いシャツで全体的に黒くて背も高いからなんか威圧感を感じる。勉強には真面目だから意外だが、学校生活は真面目とは言い難いのがこの人だ。

「謝る気がないなら、金輪際澪にも新城にも手え出すな。」

「お、おお…。」

尻尾を巻いて去っていく三人にひらひらと手を振ると、俊兄はいつものように笑った。

「大丈夫？ 澪。」

「大丈夫ですうー。俊兄様が来てくださるなんて感激です！」

俊兄に抱きつく澪。俊兄を不審そうに見ていた新城が、ようやく口を開いた。

「黒島先輩と鳴瀬って…。」

「下宿先が同じなの。俺は俊兄のおかげで安全なんだよ。」

まあお前みたいに不良に突っ込んでいけないからどっちみち大丈夫なんだけどな。

「そうか。じゃあ俺はお前と居たら安全だよな。」

何言ってるのこいつ。

「黒島先輩は俺のことご存知で。」

「有名だからな。腐ってた剣道部を廃部に追い込んでくれて助かったと理事長とその身内が言ってたんだ。まあ瑞樹をよろしく。」

ジョー兄、そんな話してたのか。っておい、最後なんだった。

「最近先輩方に絡まれるのうんざりだったから鳴瀬と居たら大丈夫か。よろしく。」

「つまりは友達って事ですな！」

「おいおい聞いてねーぞ！」

俊兄に文句を言おうとしたら既にもう居ない。真顔の新城と、はしゃぐ澪とだけ取り残された。

4話：諦めません

「まひろさぁーん！おはようございます！」

「おはよう、泡沫。」

「いい加減名前で呼んで下さいよう！」

「止めるお前ら、カップルみたいだ鬱陶しい。」

新城真宏と仲良くなった、というか近くに居るようになってから一週間位たった。

「友達は名前で呼び合うものだと、昨日読んだ本に書いてありました。」

「そうか、参ったな。」

呼び方についてマジで悩んでいるこいつは思った程悪い奴でもないらしいとわかった。とはいえ不良のような雰囲気は苦手だ。周りもこいつと俺と一緒に居る事が不思議らしい。俺も不思議だよ全く「そっぴや、黒島先輩と仲良いんだよな。付き合ってるのか？」

この前漕が俊兄に抱きついてた所、見たんだっけこいつ。あれからも学校で俊兄に会う度に過剰なスキンシップをしてくるから、そう思ってもおかしくはないのかな。

「あたしと俊兄様はラブラブです！」

「嘘つくな！つかラブラブなんて死語どこで覚えた。」

「ひい姉様に漫画を借りてるんです！」

「なんだ、付き合ってるわけじゃないのか。黒島先輩も嫌そうな反応してなかったが。」

俊兄は嫌でも嫌な顔しないからな。多分内心凄く嫌だろう。最近俊兄が可哀相に思えてくる。

「大丈夫です！あたし頑張ってラブラブします！よろしく願います！」

「おう、頑張れよ。」

眞宏も応援する気か。どうでも良いが、漑の敗北は決まってるよ
うなものなのに。

「デート？漑と？」

「そ！この前瑞樹が溺れたせいでお出かけ台無しだったじゃない？
私は週末バイトだし、瑞樹は邪魔だから二人で行ってきたらどうか
つて。」

俺が邪魔とはどういう事だ。そしてひい姉は無自覚だから仕方な
いが、これ以上俊兄を苦しめるのを止めてくれ。

俊兄はどう反応したらわからないのか、ただ苦笑いしている。

「俺、勉強したいんだが。」

「馬鹿、勉強より大切な事よ。あんた遊び方知らないと苦労するよ
絶対。」

一理あるけど、そう言うひい姉も遊ばないもんなあ。勉強もしな
いけど。

「漑は？」

「行く気満々よ。」

「そうか、仕方ないな…。」

俊兄も渋々了解した事で、二人のデートが決まった。ひい姉はは
機嫌よさそうに漑の元に向かう。ああやっぱ俊兄可哀相だ。

ひい姉様から頂いたお洒落なワンピースを着て、ひい姉様に髪型を整えてもらい準備完了です！メイクも教えてもらいました。ひい姉様、本当に素敵なお姉様です！

「可愛いよ澪ちゃん。やつば髪巻くの似合つと思った。俊は多分ゆるふわというものはよく知りませんが、要するに、あたしは俊兄様の好みの女子という事でしょう。我ながら照れます。」

「ふん、俺が女装した方が可愛いね。」

瑞樹さんは嫌味です。昨日からあたしに色々グチグチ言ってます。

「もう瑞樹、あんたが俊好きなのはわかるけど嫉妬はよくないよ？」
「ボーイズラブやれてか！」

じゃあ何でこの人こんなに不機嫌なんでしょう。よくわかりません。

「ちよつと俊兄様の所行ってきます。」

頑張つてねー、と手を振るひい姉様と相変わらず不機嫌な瑞樹さん。気にしません。あたしには味方が沢山居ますから。

俊兄様の部屋に入ると、丸机を囲む俊兄様と、二人の女の子が居ました。勉強を教えていたようです。

「俊兄様…誰です、その子達。」

「あ、ちゃんと話してなかったな。ここに住む中学生の麻衣と結愛だ。」

色黒でショートヘアーの子が麻衣さん、色白でロングヘアーの子が結愛さんだと、教えてくれました。

「よろしく願います…。」

「ねえあんた、俊兄ちゃんの彼女？」

ボソツとつぶやいた結愛さんと対照的に、いきなり質問する麻衣さん。

「今からデートでしょ？隅に置けないねえ兄ちゃんも！」

「飛鶴さんと…結婚すると、一時的本気で考えてましたが。」

「馬鹿っ、俊兄ちゃんは意外と可愛くて小さいのが好きなんだよっ。」

「随分勝手だなお前ら。」

苦笑しながら二人の頭を撫でると、重たそうに腰を上げました。

「さて、飛鶴にどやされないうちに行くか、漣。」

「はいっ！」

飛鶴さんと結婚とかどうこうが引っかけられますが、気にしません。だってあたしは俊兄様の好きな可愛いゆるふわ系ですから。

漫画を参考にすると、最後はキスらしいですね。俊兄様は人間ですから、人間の常識は心得ているでしょう。キスは経験ありませんから緊張します。

「デートなんてした事ないからよくわからないけど。」

そう切り出した俊兄様。ではあたしが初デートですか。漫画で見たようなものとは多少異なるかもしれませんが良いです。あたしが俊兄様にとって初めての女なんですから。

というわけで、デートに人気という公園をぶらぶらしています。

「何したい？」

「よくわかりません。」

「お金は一応あるけど…近くに動物園あるから行ってみるか？」

どうぶつえん？

「よくわかりませんが…行きましょー！」

「よし、わかった。」

そうして向かったのは、何やら変わった所でした。門をくぐって出迎えたのは、首の長いキリン、白黒のシマウマ。水浴びをしている大きな力バ。雪の話や書物でしか見た事のなかった、生き物達ばかりです。

「これは何ですか？なんか、癒やされますう…。」

「ああ、アルパカだな。最近ブームなんだよ。」

「木に登って動いてないんですけど、大丈夫なんですかあれ。」

「あーナマケモノだな。あれはあれで良いんだよ。」

わからない動物も、俊兄様が丁寧に説明してくれます。本物知りですね。

「ライオンって瑞樹さんみたいですね！俊兄様はオオカミって感じですよ。」

「特徴掴んでるの髪の色だけじゃないか。」

「ひい姉様は…あそこの孔雀とか、ツルとか…。ほら、綺麗な方ですから！」

「そう…だな…。」

俊兄様は苦笑しながらあたしの頭を撫でました。もしかして例えが微妙だったんでしょうか。

「ひい姉様は孔雀は違いますかね？」

「いや、別に…。そんな事より土産でも買いに行くか。」

「…？はいっ。」

様子がおかしいですね。というか、今日の俊兄様は反応がイマイチな気がします。

立ち寄った土産屋には可愛いぬいぐるみがありました。

「チビ達に買っていくか。澪も、何か欲しいのあるか？」

「買ってくれるんですか！」

漫画では男の子が好きな子にプレゼントするシーンがありました。が正にそれですね！

「じゃあこれにします！」

選んだのは腕で抱ける位のイルカですが、園内にイルカが居た記

憶がありません。まあイルカはよく遊んでいて好きなので気にしません。

「俊兄様？」

イルカを見せても何も反応が無かったので呼んでみると、小さい子供や中学生達に選んだマスコットを手に、また何か選ぼうと迷っていました。

「何してるんです？」

「あー、飛鶴にもって思ったけど、ぬいぐるみとか好きだったかな…。」

成る程、確かにぬいぐるみを抱いているイメージはありません。

「って…園内に居ないのにイルカはお土産としてどうなんだ。」

「…それ思いました。」

やっぱり海の生き物が好きなんだな、そう言っただけで笑った俊兄様は、あたしが人魚である事をやはり信じてくれているのでしょう。

「で、問題の飛鶴だ。…もういいかこれで。」

そう言っただけで手に取ったのは、割と大きめの熊のぬいぐるみ…デデイベアでした。

「ちよつと高いけど、まあ良いか。」

「これみんな買うんですか？お金持ちですね…。」

「親がよく金送りつけるんだよ。誰が使うかって思って貯めてたんだが、使わないと意味ないよなあ。」

一瞬だけ眉間に皺が寄って、不機嫌そうに見えましたが…。

「悪い、なんか今俺、変な話しか気がするんだが。」

「いや、別に变じゃないですけど…。」

ちよつと違和感を感じましたが、訊くのもあれですので、お会計を済ませてそのまま帰りました。

「あれ、随分早かったんだな。」

帰宅して迎えてくれたのはジョー兄様でした。

「ただいまです！見てください、イルカ買ってくれました！」

「ほー、女にプレゼントとは俊もなかなかやるじゃねえか。」

「零だけにじゃないぞ。」

帰宅を感じたのか、リビングに集まってきた子供達にお土産を渡しました。ライオンにキリンにコアラに色々です。

「ありがとーおにーちゃん！」

「おにーちゃんだいすき！」

「はいはいそんな抱きつくなくて重たいなあ。お前らいつそんなに大きくなった。」

笑顔で子供達の相手をする俊兄様はお父さんみたいです。

「お帰り兄ちゃん！デートどうだった？どこまで行った？」

「止めなさいよ麻衣……。」

「あ、麻衣と結愛にも土産。」

なんだか正反対な麻衣さんと結愛さんが貰ったのは、カピバラとアルパカでした。

「ちよっ、うちの動物のチョイスがちよっとマニアックな気がするけど可愛いから許す、ありがとう。」

「アルパカ……可愛い……。」

「おいおい、そんなマニアックじゃないぞカピバラにアルパカは。そーういや麻衣、飛鶴と瑞樹は。」

「ひい姉ちゃんならバイトだよー。遅くなるって。瑞兄は友達と遊び行った。瑞兄が友達と遊びなんて珍しいよね。」

そうなんですか。よく遊んでそうなイメージがありますが。だとしたら最近仲良くなった眞宏さんでしょう。

「あの……楽しかった？」

そう尋ねる結愛さんに、俊兄様は笑顔で答えました。

「楽しかった。」

飛鶴さんへのお土産を手に、部屋に戻る俊兄様に着いていきました。忘れてた事があつたのです。

「キス忘れてました！」

「はあ……？」

「デート後のキスですよっ！人間にとって常識なハズです！」

呆れ顔の俊兄様。なぜでしょう。

「残念ながら常識じゃないんだよ。それに濡、引っ張るのは悪いから言っが。」

こういう時って大抵告白だと漫画に書いてありました。少しの沈黙の後、俊兄様が真顔で言いました。

「俺は君の恋人とか……そういう関係になるつもりはないよ。」

「えっ……。」

予想外の言葉です。流れるにおかしいですよ。

「それって……。」

「ごめんな濡。」

「つまりは、あたしがまだ女として未熟だからですね！」

と、漫画に書いてありました。

俊兄様の驚いた顔。どうやら当たりのようです。

「諦めませんよ！あたしが人間の女として成長出来たらラブラブしましょう！子供作りましょう！」

まだ余地があります。期限は一年ですから。

「あたし頑張ります！」

目標が出来ました！それで十分です！俊兄様も驚き感心してくれました。待っててください！

俊兄様が何か言いたそうでしたが、告白なら、まだあたしには相応しくないので聞かずに部屋を出ました。

「ただいまぁー。今ご飯つくるからねえー。って、お惣菜買ってるし！あれ程お惣菜駄目って…ちよつと俊ー？」

部屋の扉が開いた。数学と格闘中だった頭に段々近付いてくる飛鶴の声が響く。

「また勉強？ご飯は食べたの？」

「食欲が無いんだよ今。」

「馬鹿、ちゃんと食べないと勉強出来ないよつ。後でちよつとつまめる物持つてこよつか！あ、あとインスタントラーメン賞味期間近いんだよね。お湯沸かすから…。」

「飛鶴。」

「な、何よ。」

「ぬいぐるみとか柄じゃないかもしれんが。」

不審そうな顔をする飛鶴に、適当につかんでデイベアを投げた。
「動物園の土産な。」

「うっそ、私に…？」

「飛鶴、バイトで疲れてるだろ、俺の事は気にすんな。今日はもう休めよ。」

バイトを掛け持ちして、家事全般もして、それでも誰にも手伝わせないとするから、いい加減辛くはないのかこいつは。

殆ど遣えてないような気遣いに、飛鶴は笑顔でぬいぐるみを抱き締める。

「何よお。あんたこそ私の事気にしないでよねっ。」

またそうやって自分の事は放っておくんだ飛鶴の奴。顔をうずめるように抱き締められているぬいぐるみ越しに、飛鶴の大きな目が笑っている。

「ぬいぐるみ…ありがと。持ってたから一個位欲しかったの。」

「そうか、それなら良かった。」

ぬいぐるみなんて、笑われたらどうしようかと思ったが、意外と可愛いものも好きらしい。覚えておこうか。

「お腹すいたから食べてくるね！」

「ああ。」

「俊も早くおやすみ。」

ぬいぐるみを抱きしめたまま部屋を出る飛鶴。喜んで貰えて良かった。あいつの嬉しそうな顔を見ると俺だって嬉しい。

もし、俺が澪を受け入れたらあいつは嬉しいのだろうか。

「…どうするかな…。」

考えたってわかるわけがない。今向かい合っている昨年のセンタ―試験の数学の問題の方が簡単に思えてきた。

「はあ？諦めない？」

「だからあたしを人間の女の子にしてください！」

「そうは言ってもなあ。」

澪に俊兄とのことを聞いてやはりな、とは思ったが、こいつが違うように受け取ったようだ。

俊兄も馬鹿だ。はつきりと、好きな奴が居るから無理と言えは良かったものを。…まあそう言ったからと言ってこいつが引き下がる

と思えないけど。

何か燃えている澤。こいつ、数日一緒に居ただけだが、やはり、かなり強気な性格だ。怖いもの知らずだ。こいつなら俊兄を自分のものにしようがしないでもない。

5話：萌えなんて知りません

「お前、まず女友達を作れ。俺や眞宏とばかり居るのはよくない。まずはそこからだ。」

「別に良いじゃないか。」

「ですよー、眞宏さん！」

「変に意気投合すんな気持ち悪い。」

俺、瑞樹は学校で絶賛苦勞人中だ。猪突猛進単純強気女とデカいくせにコバンザメみたいに俺につきまとう眞宏とばかり居るハメになっている。いい加減こいつらどうにかしなきゃ、俺のイメージダウンに繋がってしまう事は必須だ。

「だがな、女にしか相談出来ない事もあるんだぜ？」

「瑞樹さんが女装すれば良しです。」

「心まで女になれってか！まあ良い、俺が女友達紹介してやるよ……」
パツと見渡しただけでも、仲良い女友達は沢山居る。何か固まってるあそこにするか。グループ単位で紹介した方が都合が良い。更に派手目の女子達で、クラスの女子の中心だから尚更だ。

「良いか……あそこに居るちよつと派手な感じの奴らが居るだろ？」

俺がそいつらを差すと、漣は神妙な顔をしていた。

「どうしたよ。」

「その人達、一人を囲んで何かやってます……。」

よく見ると、そいつらの中心には小さい女子が肩身を狭くしている。女子に嫌われてる、須波雅子だ。

「あいつは無視だ、関わ……って何しようとしてんだ眞宏。」

女子の方に向かおうとしている眞宏を、すぐさま止めた。

「止めるな瑞樹、ありゃあいじめだ。」

「おいおい、軽く絡んでるだけだろうが。」

確かに、女子達の笑い声から察するに、何か嫌な事言われているのかもしれない。須波は気の毒だが、集団にはそういう事があるべく

してあるのだと俺は考えている。

大体、俺と近くにいる眞宏があいつらに刃向かってみる。眞宏は気にしないかもしれんが、俺の評判が悪くなるかもしれないだろうが…！

「お前はああいうの見て何とも思わんのか。」

「別に、気の毒だとは思うけど仕方ないんじゃないの？」

「最低ですよ瑞樹さん！それでも血の通った人間ですか！？」

お前、そのセリフどこで覚えた。

「やっぱり俺行く。」

「あたしも行きます眞宏さん！」

「だああわかったから！俺が行く！」

こいつらに行かせたらロクな事にならない。連中が反感を買うだけだ、綺麗におさめてやる。

女子達の元に行くと、いつものように肩に腕を絡ませた。

「何やってんのお前らー。」

「あ、瑞樹い、こいつムカつくからうちの常識教えといただけ。」

「マジ？何したのお前？」

どーせ変ないちゃもんつけられたんだろう。須波を見下ろすと、上目使いで見てきた。

「こいつつまんねーな。それよりさ、転校生に絡まね？あいつマジウケるから。」

「澪ちゃんでしょ、あの子可愛いよねー！」

「本当、こいつとは大違いなんだけど。」

と言われ、ど突かれる須波。よろめいて倒れたのを見ると、女子達は散って行った。

「てめえ、あんまあいつら刺激するような事すんなよ。次はねーかな？」

それだけ言い残し、俺も女子達の元に向かう。ああ言った以上、澪に絡ませるか。

「いやぁ器用ですな瑞樹さん！あの子救えましたし、あたしは友達
沢山出来ました！」

「てめえらが真正面から行こうとするのが悪い。」

「なんやかんやで女子達と仲良くなれた漣はご満悦だ。」

「とはいえ一時的なもんだろうが。」

「と、眞宏は気に食わないようだが。」

「なんだよ、別に仲良くもねえ女にどこまでしろってか？」

その場しのぎなのはわかる。でも確かに須波は助かったはずだし、
これ以上の事をするのは偽善にも程がある。

「他人のために自分を犠牲に出来るか。俺はそこまで出来た人間じ
やねーよ…ん？」

見ると漣と眞宏が目を見開いている。

「どうした二人とも…。」

「鳴瀬くんっ！」

高い声が聞こえる。後ろの下の方だ。目線をそちらに向けると、
須波雅子が顔を真っ赤にしながら俺を見つめていた。

「ああのっ、さっきは、ありがとう…。」

わざわざ礼を言いに来たのか鬱陶しい。

「あの、それでそのっ。」

「何だ。」

「私と、三次元の友達になってくださいっ！」

俺達が啞然とする中、精一杯頭を下げた須波は盛大に転んだ。

「大丈夫ですか？三次元とかよくわからないんですけど…。」

漣の手を借りて立ち上がった須波は、しまった、と顔を更に赤ら
めた。

「むむ無視して！そこ無視して！」

「でも気になりますー!。」

「俺もよくわからん。」

触れない方が良い気がするぞ二人とも。大方、二次元には友達が居ます、という事だろう。サイト内での友人か、あるいは漫画やアニメの世界の人物相手の妄想か。どちらにせよ須波は哀れな奴だ。

「わ、私その、所謂オタクなんだけど。」

後者か。まあ自称オタク程痛いものはないけど。

「パソコンなんか好きで…。」

まさかのどっちもか。

「でも、友達が欲しい…です。」

「よくわからないですが、友達になりましょう!。」

手をとる澪。わからないのは当然か。眞宏は流石に駄目なんじゃないのか?不良とオタクは犬猿の仲だというのはよく聞く。

「そうだな。俺だって漫画好きだ。」

大丈夫な不良かお前は。漫画好きなだけはあまり関係がないけど。

「あっありがとう澪ちゃんに新城君。」

須波と目が合う。キラキラした目線。俺に何を期待してるんだ。

意を決したのは知らんが、一息ついて須波は言った。

「鳴瀬君…私、ツンデレな王子様、結構好き…だよ?」

はい?

「ごめん!。」

走り出す須波と笑いそうな眞宏。よくわからないという澪は良いが…。という事だ、それは。

「完全に、好かれたみたいだな。」

眞宏がそう言って、気づくまでに割と時間がかかった。

ツンデレの意味位知っている。だが自分をツンデレとは思ってないし、まして王子様なんて意味不明だ。須波は重傷だ、まいったな。しかも席が斜め後ろだ。常時視線を感じるんだがどうしようか。

「瑞樹、腹を括ったらどうだ。好かれてしまったもんは仕方ない。」
「ざっけんな！誰があんな変人…。」

「良い考えがあります！」

澪の良い考えなんて期待しない。

「友達って休日遊ぶものなんですよね！だから…。」

「却下、てめえが遊びたいだけだろうが。なあ眞宏。」

「友達の家に上がった事ないな…。」

澪は勿論眞宏もだめだ。なんでこんな独特のペースがあるんだよお前ら。

「じゃあもうすぐテストがあるし、勉強しないか？」

という眞宏の提案。俺には俊兄という家庭教師が居るから勉強会なんざ必要ないが…。

「良いですね！あ、須波さん！」

三人だけの教室に入ってくる須波。

「何か用事？澪ちゃん。」

「はい！一緒に勉強する計画を立ててたんですが、須波さんも一緒にしません？」

お前がここに呼んだのかよ。つか勉強勉強って、一緒に勉強ほど効率悪いと思うんだが。

眞宏が何かを取り出して、俺らに見せた。

「学期始めのテストの順位だ。」

なぜ今それを？と思つて見ると、上位の所に須波の名前があつた。

「凄いです！勉強教えてください！」

「俺にも。お前もだよな瑞樹。」

改めてて順位を見ると、俺は眞宏より低いようだ。

「別に俺は良いし…。」

「空気読んでください!」

お前が言っな遷。

まあとやかく言われるのもあれだし、勉強になるなら、今忙しい
俊兄を使うより良いか。別に教えて欲しいと本気で思っているわけ
ではない。

「ですが、子供達の面倒を見なくてはならない瑞樹さんは来れなく
なりました。」

既に待ち合わせていた眞宏さんと須波さんにそう告げるのは苦痛
でした。

「仕方ないな。」

「なんだあ、残念。」

じゃあ今日はお開きかな、という雰囲気須波さんを、しっかり
捕まえました。

「勉強教えてください。そして恋バナしましょう…。」

「恋バナ?」

「俺居ない方が良いよな。」

そっう眞宏さんも確保して、ファミレスに入りました。

「そもそも何で瑞樹さんが王子様なんですか？」

勉強が一段落ついたので、疑問をぶつけてみました。

「いきなり何でっ…。」

「気になりますもん！」

「うー、だって助けてくれたし…。」

あの時の瑞樹さんのやつつけ仕事ですか。

「あと鳴瀬君って顔綺麗だし金髪だしスタイル良いし、私が憧れた二次元の世界の人みたいだし。」

「確かに、現実味ないよなあいつ。」

眞宏さんは納得したみたいですが、やはりあたしにはさっぱりです。

「瑞樹が好きなんだな。」

「恋ですね！わかります！」

あたしも多分同じですし。

「これが恋ですか…。」

漫画みたいです。恋を知らなかったんですね。初恋が瑞樹さんですかあ。

「初恋同士頑張りましょう！」

「え、あ、うん！」

戸惑う須波さんですがわかります。初恋は戸惑うものなのですから。

「そっぴや眞宏さんの初恋って何時でした？恋愛と無縁そうに見えますけど。」

でも答えは意外なものでした。

「小さかったから覚えてないな。」

「小さい頃からですか！大人ですねー。」

「ガキだから大した事じゃない。最近まで彼女居ただけだな。」

更に問い詰めると、今まで居た彼女の数は数えた事ないとか。

「大分曖昧な感じですが師匠と呼ばせて下さい！」

「それは困る。俺告白した事無いし。」

「それはつまり、寄せ付けて自分のものにする力があるという事ですな！」

「澪ちゃん、声大きいよ……。」

いけません。ヒートアップしてきました。周りの人間がこちらを見えています。

「えーっと、新城君ってモテるんだね………つごめん！」

鯨に睨まれた小魚のように縮こまる須波さん。実際眞宏さんは須波さんをジーツと見ながら動きません。

「あの、眞宏さんその人をジーツと見る癖氣を付けて下さいよ？」

「みつ澪ちゃん！別に怖いってわけじゃあ……。」

「悪い。氣を付ける。……これ以上人に避けられるのは勘弁だからな。」

と言つてジューズを啜る眞宏さん。

何か地雷を踏んでしまったようですね……。

「ご、ごめんなさい、あの……嫌いにしないでお願い……。」

涙目の須波さん。嫌いにならないでつて大袈裟な氣がしますが……。眞宏さんも、苦笑しながら言いました。

「いや、むしろ俺が嫌われたかなつて。」

「もう何なんです二人とも！いちいち何氣にしてるんですか！相手が嫌いか好きかなつて……。」

氣を遣つてたら氣持を伝えられないじゃないですか！

「でもちよつとした事で嫌われるもんなんだよ澪ちゃん……。」

「目線だけで暴力に発展する事もある。」

「だから私、友達居ないんだ。」

「俺もだ。」

ちよつとした事でつて……それは相手の心が狭いだけの氣がします。あたしはよつぽどの事が無い限り人を嫌ったりしません。ましてや大人しくて可愛い須波さんや良い人な眞宏さんを。

「だから、鳴瀬君に迷惑だつて嫌われたらどうしよう。」

もし、そんな事があるのなら、あたしも俊兄様に嫌われてしまう

のでしょうか。そんな方ではないとは思っていますが…。

「どう思います？」

「要するに、須波は俺が好きだけど迷惑かどうか、だと。そうです、と頷く濤。」

自習時間で多少ざわついているとはいえ、人も多く本人も席が近いにそんな話をして良いのか。

そしてそんな事訊かれても困る。俺にその気はない。

「どう思うつたってなあ、」

そんな事より大量の自習課題が問題だ。俺は提出物はちゃんとする主義だけど、この数学のプリント、わけがわからない。

「お前ら、あんまそういう話は控えとけよ。」

須波がいるから、と、指摘する隣の席の眞宏は、後ろの席の須波に課題の問題を教えてもらっていた。

「須波の教え方はかりやすいな、助かった。」

「う、ううん。」

恐縮する須波。まだ眞宏に慣れてないのがわかる。話す時も若干ビクビクしてるし。

「眞宏終わった？写させろよ。」

眞宏のプリントを取ろうとするが、よけられる。

「断る。お前も須波に教えてもらえよ。」

「そうですよ！仲良くなる良い機会です！」

何こいつら気い遣ってんのか？困る。だが、プリントが埋められないのもよろしくない。

「私で良かったら。」

「仕方ねーな、頼まれてやるよ。」

眞宏の席を借りて須波に向き合つと、手際良く解説を始める。俺の滅茶苦茶な解答を見て、何がわかってないのかが理解できているようだ。

こいつ何気に凄い。噂では鈍臭くてのろまでオドオドしていて絡み辛い奴だと聞いてたけど。

「二人ともお似合いじゃないですか!」

「そうだな。」

「おい、そこ変な事考えんな!」

須波の意外性は評価してやる。だがそれとこれとは別だ。調子に乗り始める澪を無視して、サクサクと進めた。

どっちみち、須波を振る事には変わりはない。しかし振った事のない俺。どうしたものか。

「つーかさ、今日の体育最悪なんだけど。うち須波と同じチームだし。」

「ヤバ。足引つ張るとかマジ勘弁だよね。」

割と大きな声で話す女子。昼休みで教室には須波を嫌う女子のグループと、澪と眞宏と須波。そして今俺は加藤達と飯を食べている。鳴瀬つて須波に好かれてるんでしょ。」

加藤にそう言われ、思いついた。振る前に須波には諦めて貰おう。仲良くしてるみたいだし、やっぱ付き合っわけ?」

「冗談だろ。」

加藤の問いに、さっきの女子同様、須波に聞こえるように言った。

「須波別に興味ねーし。」

「鳴瀬は恋愛自体興味ないじゃん。」

「まーあったとしても須波はねえわ。」

笑いながら言う。というわけだ、諦める須波。直接振られるよりは良いだろ。

椅子が倒れる音、漣の「須波さん！」と呼ぶ声。教室から誰かが飛び出す。恐らく須波と追いかけていった眞宏だろうか。

「瑞樹さんの馬鹿っ！人でなしっ！」

激昂する漣。面倒な事になってしまった。なんで理解してくれないんだ。

「だーから、直接振るのは残酷だと思ったの俺は！」

別にわざわざ説明しなくても良いのだが、勘違いされたままも癪なので、不機嫌な漣といつにも増して怖い眞宏に説明をしている。

「でも須波さん泣いてしまったじゃないですか！」

「それは須波の理解力が乏しかったからじゃん。」

「そんなもん知りません！」

須波もそうだがこいつらも馬鹿だ。何熱くなってるんだ。

「大体マジになるから泣く事になるんだろーが。適当にやりやあ楽なのに。」

「要するにお前が逃げたいだけだろ。」

眞宏が静かに口を開く。本人は睨んでるつもりは無さそうだが、それでも怖い。

「卑怯だな。」

そうだよ、俺は卑怯だし逃げてるし、だから人間関係に苦しんだ

事が無い。お前らと違って。

気分悪いまま帰宅した俺は、機嫌悪そうな俊兄と鉢合わせした。
「おかえり」とだけ言って自室に入ってしまった俊兄。こういう時は
どういう時は理解している。

「また女子に告白されたいのよね。それをちゃんと丁寧に断つ
て。したら女子が泣き出しちゃったの」

ひい姉がコーヒー牛乳を作りながら苦笑する。

「俊、あんなだから罪悪感で一杯みたいでさ。」

「別にさ、ちゃんと降らなくても適当に避ければ良くね？何で自分
も相手も傷つく方選ぶんだよ。」

もしかしたら自然に気持ちが消える事もあるのに。

「どっちにしるお互い苦しむ事になるんじゃないの？」

俺にコーヒー牛乳を差し出し微笑むひい姉。

「だからどうせなら、けじめつけた方が良くないじゃない。曖昧にして、
相手が自分を振り切れない時間が勿体無くて申し訳ないって、俊言
ってたのよ。早く自分を忘れて欲しいからハッキリさせる…まあ簡
単に言うけど無茶言ってる事位あいつわかってんのよ。それでも、
ね、狡い方法とるよりはずっと良いだろう、って。」

そうやって俊兄はずっと苦しんできたわけだ。ひい姉に色々明か
す俊兄がなんとなく想像出来た。

「まあ俊兄はそうだよ、でも俺は狡くでも何とも…。」

「なんかあったでしょ？辛そうな顔してる。」

何でもお見通しかこの人。なのに自分に胸中を話してくれる俊兄
の気持ちに気付かないなんてひい姉、やっぱりあんまりだ。俺が言

えた事じゃないけどな。

瑞樹さんとは昨日全く話ませんでした。あの人本当信じられないです！須波さんに謝るまで口利かない事に決めました。

眞宏さんにそう言ったら苦笑しながら「あいつはあいつで思う事があるんだろうよ」と言っていました。

昼休み、眞宏さんと須波さんの所に行ったら、泣きはらした目で「大丈夫だよ」と笑っていました。

「嫌われるのには慣れてるし…それにやっぱり迷惑かけたくないし…これで良いんだあ…私は。」

何故笑いながらそんな事を言うんでしょう。本当に良かったんでしょうか。

「…まったく、嫌われる事に慣れるものじゃないぞ。」

眞宏さんがいきなりそう言つと、須波さんはビクツと肩を震わせ、あたしの背中に隠れました。困った風に眞宏さんが「俺だって怖がられるのには慣れてない。」と笑いかけると、あたしから離れてくれました。

「瑞樹はツンデレなんだろ？だからあんな態度とったんじゃないのか？」

「だーれだツンデレだ。」

眞宏さんの背後から現れた瑞樹さん。

「何の用です瑞樹さん。」

「おいチビ。てめーに用事だ二言三事で終わらす。」

チビと呼ばれた須波さんはおそろおそろ顔を上げて瑞樹さんを見ました。

「昨日は悪かったがためーとは恋愛関係になるつもりはねえからな。それだけだ。」

「じゃあ。」

須波さんは目を見開き言います。

「私は嫌われてないの？君に。」

須波さんのキラキラとした目を向けられ、顔を背ける瑞樹さん。

「誰がいつ、須波を嫌いだと言ったよ。だが勘違いすんなよ！好きってわけじゃねーからな！」

「ありがとう！」

笑顔になる須波さん。

「は？」

「私、嫌われてなかったんだあ。」

「いや、俺今お前の事振ったんだけど。」

「そうですよ、失恋したんですよ？」

なのに何で笑顔でありがとうなんでしょう。首を横に振って須波さんは言いました。

「別に、恋じゃなかったみたい。」

えっ…。

「よく考えたけど何か違ったみたい。流石の私も二次元のヒーローに本気で恋した事ないよ？」

あたしはよくわかりません。笑いをこらえる眞宏さん、そして肩を震わせる瑞樹さん。

「散々人を悩ませといてなあ…！」

「あ、でも須波に恋だと最初に言ったのは泡沫だよな確か。」

「そうだね、あれちよつと私もびっくりしたもん。」

勉強会に居た二人が言いますがそうでしたっけ忘れしました。

「漣…てめえか話をデカくしたのは…。」

「みたいですねーまあ良かったじゃないですか勉強になって。」

物事は前向きに考えようと雪も言っていましたし。

「良くねえわ！」

「つーわけで勘違い勘違い。」

「お疲れだな瑞樹。」

帰宅して俊兄に愚痴つてやった。笑いながら話を聞く俊兄は大分機嫌が良くなったみたいだ。

俊兄となら落ち着いて話が出る。いつも相手に合わせてくれるし、話し方も丁寧だ。だから異性受けも良いのかもな。

「俊兄もどうすんだよ澪。」

「あの子、正直振り切れる自信が無いんだよ。何度でも立ち向かってきそうだ。」

笑いながら言うが笑い事でもない。俊兄がそれで良いとは思えない。だから俺は俊兄の味方だ。俊兄が報われないなんて俺は納得出来ない。

6話：決めました

「あー！」

ひい姉の声で俺の眠気が覚める、梅雨入りしたばかりの湿っぽい朝。ひい姉はバンダナで包んだ弁当箱を俺に渡した。

「何、俺もう弁当貰ったけど。」

「俊が忘れちゃって。届けてくれない？」

渡された弁当箱をしぶしぶ受け取る。普通なら同じ学年のひい姉が持つて行くべきなのだが、俊兄とひい姉が同じ所に住んでいる事を、二人の同級生は誰も知らない。

「何か知られて問題でも？」

昼休み、三年の教室に向かう途中、やはり疑問だったのか漕に訊かれた。

「俊兄は人気者なわけだ。だから同級生の女子と一つ屋根の下なんてなったら軽くじゃない位騒ぎになる。そうなりゃ俊兄もひい姉も可哀想だろ。」

もつと事實は色々あるが、これ位にしておいた。

俊兄は三年二組。因みにひい姉は三年三組。理系が二クラスあり、文系が三クラスあるのがこの高校の編成だ。

二組の前でキョロキョロしていると、一人の先輩に話しかけられた。

「鳴瀬ではないか、黒島に用か。」

「藤堂先輩。」

プライドの高そうな眼鏡と影で思っている藤堂先輩は、俊兄の友人だ。

「弁当箱忘れちゃったみたいなんすけど…。」

因みに俺と俊兄が同じ所に住んでいるのは割と多くの生徒が知ってるから問題ない。

「例の賄いさんの？」

「ねー鳴瀬、やっぱり賄いさんって美人なのお？」

「わらわら寄ってきたのは確か藤堂先輩と俊兄の友人達。弁当を作るひい姉の存在は、賄いさんとなっているようだ。」

「黒島、俺らに賄いさん紹介してくんねえかな？な？藤堂？」

「止めておけって、藤堂が興味あんの赤坂さんだから。」

「赤坂さん、ひい姉か…ってマジすか！」

「赤坂も美人だけどさー。」

「き、貴様ら赤坂さんを侮辱するな！」

「赤坂がどうしたって？」

「俺が持つ弁当箱をひよいと受け取り現れた俊兄。俊兄は学校ではひい姉を「赤坂」と呼ぶ。」

「黒島！丁度良かつ…。」

「俊兄様っ！」

「藤堂先輩が俊兄に近寄るより早く、漑が抱きついた。何でここでも積極的なのかいっ。」

「お、お、黒島、君？彼女？」

「あ、泡沫漑です！俊兄様とは結ばれる予定です！」

「戸惑う友人さん達に自己紹介する漑。」

「いや、この子そんなじゃなくてだな。」

「お前、賄いさんの事あんなに自慢げに話してて彼女居たのかよっ！」

「水谷いー俺がいつ賄いさんについて自慢げに話した。」

「否定しようとする俊兄に詰め寄る水谷という先輩。」

「どういう事っすか藤堂先輩。」

「自慢げ、というか、賄いさんがどれだけ良い女性か話してくれた事があってな。まかさ黒島が一人の女性に執着してたとは驚いたよ。」

「俺は漑を見る。賄いさん〃ひい姉だと理解している漑は…不機嫌だ。」

「違いますもん… 俊兄様はあたしの…。」

「おおつ、黒島、笑顔が素敵で料理が得意で気が利く賄いさんか、発展途上が魅力的な澪ちゃんかどっちを選…。」

「黒島は家庭的な子がタイプだからね。」

パキッ

と音がして、一同が俊兄を見た。開いた弁当箱、そして俊兄の手の中で真つ二つのプラスチックの箸。俊兄、軽く怒ってる。

「お前らー。」

「…ごめんなさいー。」

こういう流れは日常茶飯事だと、藤堂先輩は苦笑しながら教えてくれた。水谷先輩も大変だな。

「ひい姉様は… ひい姉様はあたしを応援してくれています。嘘だったんですか。」

何故そうなる。

「酷いです… つひい姉様…。」

「瑞樹、何があったの？」

帰宅したあと澪は真つ先にひい姉に詰め寄った。おかしくないかこいつ。悪いのは俊兄だろ、まあ俊兄も悪くないが。

いきさつを軽く話すと、ひい姉は俊兄の部屋に向かった。恐る恐る付いていくと、ドアを勢いよく開ける音。そして。

「俊っ！あんたばっかじゃないの！」

ひい姉の怒った声は久々だった。あの人あんまり怒らないから。

「何私の自慢なんかしてんのよ！良い？あんたには澪ちゃんが居るんだから！いい加減気持ちに答えてやっても…！」

「飛鶴。」

振り返る俊兄。怒ったひい姉を前にしても冷静な俊兄が恐ろしい。「お前の話になったのは…水谷達に賄いさんの話をせがまれたから、漑の気持ちに答えないのは勉強に必死だから。何か文句あるか？」
無い、というか言えない。ひい姉は水谷先輩達のノリも、俊兄の受験の大変さも知っているから。

「…ごめんなさいっ…。」

「おいおい、飛鶴が謝る事は何もしないだろー？俺が自分の事で手一杯なのが悪いんだし。」

優しく笑う俊兄を確認してホッとしたのか、ひい姉の顔も和らぐ。
「うんっ…じゃあご飯支度してくるね！」

ひい姉が部屋を出て行ったので、俺と俊兄だけが残った。

「…あいつ、何であんなに必死なんだろうな。」

「俊兄…？」

辛そうに笑う俊兄。あーやっぱりこの人ひい姉が大好きなんだな。水谷先輩達に話す姿も想像出来る。

そもそも漑が来なければこんな事にならなかった。俺だって眞宏や須波と親しくなる事はなかった。恐ろしわ漑は。今までの俺らを見事にかき乱してくれた。

俊兄を見ていられなくて一階に戻ると、漑の拗ねた声とひい姉の困った顔。

「だから漑ちゃん。本当に俊が好きとかそーいうのないから、ね？」

「でもっ…俊兄は絶対ひい姉様が…。」

「もうそんな拗ねないでよー。」

あくまで笑顔を通すひい姉。だが俺の沸点はそう高くはなかった。椅子を蹴り上げると、漑とひい姉ははびくりした様子で俺を見る。
「瑞樹？」

「困ってんだよ俊兄は。てめーがしつこいから。すっげー困ってる。」

ひい姉が制止しようとするが無視だ。俺は迷わず漑の襟首をつか

んだ。

「海から来たんだろ？じゃあさっさと帰れよ。せめて海に溺れて…。」

「続きを言おうとしたが後頭部が衝撃を受けて、俺は一瞬意識が飛んだ。俺を拳骨で殴った俊兄は、俺から解放された漑の頭を撫でるとひい姉に向き合う。」

「瑞樹は後で覚えてるな、で、飛鶴。」

「ひい姉が息を呑む。流石にひい姉も気づいたんじゃないか？どうなんだ。」

「ていうかお前らさ、何を勘違いしてんのかわかんないけどさ、何？俺が飛鶴を好きだって？」

「さっきの苦しそうな俊兄が嘘だったかのようだ。心底呆れたように、冗談じゃない、と言わんばかりに笑う。」

「だから言ってるんだろいつつもさ、俺は勉強にしか興味ないんだって。」

「よくそんな嘘がつけるよ。まあ俺に直接、ひい姉が好きだと教えてくれたわけじゃないから、何言ったって無駄だろう。」

「もー誰よ、大事にしたの。」

「ため息をつくひい姉に可笑しそうに笑う俊兄。」

「どーせ漑が気に食わないから勝手な想像してたんだろ瑞樹。」

「冗談じゃない。何でこんなに笑えんのこの人。」

「あたしも勘違いしてごめんなさい！」

「勘違いじゃない。そう漑に言っただけだった。」

「じゃあこれからあたし、頑張っただけ兄様の女になります！」

「よし！頑張っただけを落とすぞ漑ちゃん！」

「おー！」

「駄目だこいつら。話聞いてないだろ。」

「何も無かったように笑い合う。いたたまれなくなつて、二階の自室に戻った。クローゼットをあさくつて、胸元の開いたワンピースを取り出す。ずつと着ていた服を脱ぎ捨てそれを身に付けた。」

頭が冷静になった代わりに動機が激しくなった。姿見を見ると、死んだ姉貴、鳴瀬愛海がそこに居た。

無邪気で馬鹿で真っ直ぐで一途で、言葉は丁寧な俺と真逆な姉貴。やはり考えてみると澪と姉貴は…。

「瑞樹、飯。」

俊兄の声がして、動機の激しさが一瞬だけ最大に跳ね上がった。

「またその格好。」

「落ち着くんだよ。」

俊兄が室内に入る。「生活感ありすぎだなー」と意味もなく呟く俊兄の背中を、ベッドの方に思い切り押した。体格が違う俊兄とはいえ、いきなりの事に反応出来ずに倒れる。俺はその上に馬乗りになった。

「おいおいふざけんなよ。」

「ふざけてるのは俊兄だよっ。」

ヘラヘラ笑う俊兄を思わずビンタした。こんな格好で言うのもなんだが、俺、女みたいだ。

「本当はひい姉のこと大好きなくせにさ、よくもまああんなしやあしやあと…うわ！」

目の前が回転する。いつの間にか足技をかけられて、体勢が逆になつていた。今他人が来たら、相当マズい絵面だ。

俊兄の顔が近い。女の格好をしているせいか、恥ずかしい。その顔、その声で「瑞樹」と言われると尚更。女子が落ちるわけだ…。

「何だよ馬鹿兄。」

「いつから瑞樹はごまかされなくなったよ。」

いつの間にか成長して…と言わんばかりに微笑む。

「ガキ扱いすんなよ。」

「高校生はまだガキだろ、お前も俺も。」

どう返したら良いかわからないでいると、脇腹に触れられる感触。そして、俊兄にくすぐられ仰け反る体。

「ひゃあっ！何すんだ、よっ。」

「漣にひどい事言ったお仕置き。」

俊兄は子どもか！ああそっかだから自分をガキだと言ったのか。

「やめっ、あ、あは、やめろよお。」

くすぐられている感触だけでなく、ワンピースの裾が内股に擦れ、下半身を疼かせていた。

「もー降参っ、しゅ…ん兄…？」

俊兄は体から精気が抜けるように、ベッドに倒れた。体が若干熱を帯びていて、息が苦しそうだ。額に手を当てると、熱を出している事がわかった。

「おい、無理がたたったんだろ。」

「あー、少し、喉痛いと思ってたら。」

弱く笑う俊兄の目元をよく見たら隈が。ちゃんと寝てんのこの人。待ってて、ひい姉呼んでくる。」

弱り切ってしまった俊兄を見るのが苦しくて、俺はすぐさま部屋を出た。

『俊くんは本当は嘔吐きなのでしょう。』

俺によく似た姉貴が、いつだったかそんな事を言っていた。

『自分の感情も苦しみも何もかも隠して、周りが上手くいけば良いと思ってるんです。』

『だからといって…。』

『嘔吐きなんです。だから苦しむ時はいつも一人なの。自業自得ですよ。』

そしてにつこりと微笑んで「だから私が守ってあげなきゃー」と言っていた。

年の離れた姉貴は俊兄を本当の弟のように気に入っていて、そして全力で愛する人が居た。

「被るんだよね、澪ちゃんと愛海さん。」

食卓で追憶しながら呆けていると、いきなりひい姉が呟いた。考えてる事、読まれたかと思った。

「だからかな、澪ちゃんを凄い応援したくなるの。」

「それじゃあ澪が姉貴の代わりみたいじゃなか。」

そうかもね、と俺にカレーを渡す。

「でもそれだけじゃなくてね、愛海さんもそうなんだけど澪ちゃんが羨ましくって。自信と愛に満ち溢れてるっていうの？ああ適わないなあって思っちゃう。」

意外だった。ひい姉が羨ましく思うなんて有り得ないと思っていた。だって性格良し見た目良し、家事も完璧なひい姉がだ。澪なんか羨ましいなんて。

でも、ひい姉が異常な程自分に自信が無いのは知っている。

「だから俊には澪ちゃんが必要なんじゃないかな。あいつ、たまに寂しそうだから……。」

違う。俊兄が必要なのはひい姉なんだ、みんな間違ってるって言いたいのに言えない。澪の存在がそうさせてるんだ。

「そーいや澪は？」

あいつ、飯時になったらすぐ来るのにここに居ない。

「俊の所だよ。風邪感染るっていうのに聞かなくて。呼んできてくれる？」

本当に大好きなのね。そう言うひい姉は本当に嬉しそうだ。ひい姉は二人の幸せが喜びだ、とか本気で言いそうな人だから。

「そんな心配しなくても、無茶が祟っただけだって。」
「だって…。」

俊兄の部屋に入ろうとしたら、中から弱々しい俊兄と漑の声。なんとなく、入る気が失せてしまった。

『「無茶するから心配なんです…。」』

漑の声なのか姉貴の声なのか、重なったように聞こえて俺は姉貴が居るという錯覚に陥った。

『少しは自分を大切にしてください。』

「俊兄様は皆さんの兄であろうと、皆さんを守ろうと思ってるのでしょう？兄が言っていました。男は家族を守る役目があると。弱さなんて見せちゃいけないと。」

『でもそればかりは君が壊れてしまう』

漑だ。漑が話してるんだけど、やはり姉貴にしか聞こえない。

「そんな方を守るのが女の役目だと雪が言っていました。だからあたしは俊兄様を守りたいんです。」

「何でそんな事お前が言うんだよ！」

乱暴に扉を開け、俺は無意識にそう怒鳴っていた。

「わかったような口利きやがって…姉貴気取ってんじゃねえ！」

訳がわからなかった。頭ではこいつは姉貴に関係ないとわかってるのに。でもこいつを認めたくないからどうしても姉貴と重ねてしまふのかもしれない。

「漑は愛海さんじゃない。」

俊兄がハッキリと言った。ひい姉や俺みたいに迷いが無い。

「俺を好きなのも守ってやると言ったのも漑なんだ…よっ。」

咳き込む俊兄の背中をさする漑。

「瑞樹さん、あの…。」

「悪い。」

居心地の悪そうな漣が何か言いたげだったが、俺は部屋を出た。もしかして何もわかってないのは俺なのかもしれない。

「漣さんね、毎日俊兄ちゃんの所で寝てるんだよ。」

部屋に戻ろうとしていた麻衣が、通りざまに言った。

「何もわかってないわけじゃないと思うけどな。」

まあ何やってるかには知らないけど俊兄ちゃんも男だからねー、なんて事は聞かなかった事にした。カレーを食べる気になれなくてそのまま部屋に戻ると、追ってきたのか漣が現れた。

「何？」

「ごめんなさい、不快にさせてしまったみたいで。」

謝るポイントがズレてる。こいつ本当にアホだな。そして謝る理由ないのに。

「俊兄は？」

「寝ました。」

「そう、良かったじゃん距離縮まったんじゃないの？」

全然良くないけどな。漣を見ると、予想に反して浮かない顔だった。

「全然です。時間もないのに。こんなんじゃない…。」

「漣？」

急に涙目になる漣。

「あたし急に不安になったんです。一年以内に駄目だったら死ぬるのかなって。」

「お前何言ってるの？」

「私達人魚は…人間になつて一年以内に好きな人と結ばれなかったら…海の泡になつて消えます。だからそれまでに、俊兄様のために出来る事しなきゃ…。」

ああ、こんな事まで被ってるとは。

姉貴は余命一年の命を、二年前に宣告されていた。治療法が無い難病だった姉貴は、余生を都会にある実家から離れて暮らすべく、元気だった頃働いていたここにやってきたわけだ。

自分で言うのも何だが軽くシスコン入ってた俺も、この近くにある高校に入学すると共に、姉貴とここで暮らす事になる。ここに居る人は両親が居ないか、訳あった離れて暮らしているかだが、俺は単に下宿先として暮らしているわけで、両親は居るし、何かトラブルがあったわけではない。

俺は日々弱っていく姉貴の面倒を見ながら、高校に通っていた。姉貴はここで働いていた時は、ひい姉のような役割を担っていて頼りにされていたから、変な感じだとよく話していたっけ…。

そんな姉貴には好きな人が居た。ジョー兄だ。あんなニートすれの奴のどこが好きなんだろう、姉貴に聴いたら、「直感ですよ」と返ってきた。

「だって恋ってそんなものでしょう？」

ジョー兄もドがつく鈍感だったから、気が付かなかったけども。

そして、姉貴の恋はあっさりと終わった。ジョー兄の結婚が決まったからだ。色々勝手やってきたジョー兄をみかねて、父親が無理矢理見合いをさせ、案外良かったのか、ジョー兄が負い目を感じていたのかは知らないが結婚。

「まあ、私が告白したとしても死ぬ人間だからねえ。」

次の日だ。姉貴が海で死んだのは。飛び込んだのか、波に攫われたのかはわからない。でも多分自殺だと思っている。

思えば姉貴は不自由な体と人生への諦めを持つばかりで、何も趣味が無かった。唯一のここでの世話も病気によりできなくなり、更

にジョー兄の結婚相手に奪われる羽目になる。ジョー兄の事以外考
える事も生きがいも無かった姉貴に死にたいと思わせるのは十分な
んだろう。

皮肉な事に、ジョー兄と結婚した女はこの仕事が嫌だと逃げ出
し、電撃離婚する羽目になったけど。

姉貴も漑も、なぜ恋愛なんかに命を懸けるんだ。俺にはわからな
い。

『恋は病気ですから。』

『失恋は死。私にとってね。』

『だから彼を思う事は私の生きる理由なんです…。』

じゃあ漑も死んでしまうのか。姉貴が恋をしていたから生きてい
たのと同様に、漑は恋のためだけに生きなければならぬ。叶わな
かったら海の泡ね…まるで童話じゃないか。

本当、何でもこんなに姉貴と一緒になんだろう。しかもバッドエンド
は目に見えてるんだ。一年後、あいつは死ぬのか？姉貴と同じ結末
を迎えるのか？

そんなのあんまりだろう。

「漑。」

「何です？」

「お前、俊兄好きか？」

「はい！大好きですっ！」

姉貴の二の舞を見るのは嫌だとか、そういう理由じゃない。ただ、
こいつは姉貴とは違うと無理矢理証明したいのか、俊兄のためなの
か、単に漑を死なせるマネはしたくないのかわからないけど、こい
つの馬鹿みたいな恋に協力してやらんでもない。

6話：決めました（後書き）

とりあえずここまでが一区切りです。

ラブコメにしようとして暗くなりました。

瑞樹のお姉さんの事は一通り書いたし、次からは友達ズも混ぜたラブコメにしたいなと思います。瑞樹が零のためにあれこれしたりね。

7話：分かり合えないです

「漑のための部屋だあ？もう空き部屋ねーんだけど。お前そんなに床で寝るの嫌なの？違う、じゃあなんだよ喧嘩でもしたのかよ？」

最近、色彩荘の面々が俺の話を聞いてくれない気がする。

「別に勉強の邪魔してないんだろ？うん。じゃあいいじゃん。」

もつとも、こいつ、紫原丈一郎は元から人の話を聞く奴じゃないが。

「つーわけでよろしく。」

「あんたの財力ならなんとかなるだろ。頼むよ。」

「お前俺を何だと思ってんだよ。」

「保護者？」

「お前にやあちゃんとした保護者が居るだろうが…おっとそんな目で見るなよ。」

別に睨んだわけじゃない。元からこんな目だ。

「俊。後悔だけはすんなよ？」

俺みたいだねー。と笑って煙草を吹かす。

後悔も何も俺の中では気持ちは固まっているの。なのに丈兄も飛鶴も、そして漑もそんなものに屈さないと見た。

「あんたに言われたくねえよ。」

「喧嘩はよくないですよー。」

背後からひよこつと漑が顔を覗かせる。別に良いんだけど、最近漑がよくまとわりつくようになった。

「漑、お前専用の部屋欲しいか。」

「今のままで良いです！」

やっぱりな。

「あんまり俺にばっか引つ付いてるのも良くないぞ。」

瑞樹はともかく、中学生組や飛鶴ともっと仲良くして欲しいんだが。

「大丈夫ですよ。学校ではお友達に引つ付いてますから!」

そういう問題ではない。

「友達出来たみたいだな。」

「はい! 瑞樹さんのおかげで女子の友達沢山できましたし、瑞樹さんも友達出来たんですよ!」

瑞樹は友達が多いが、休日遊ぶような特定の友人が出来たとは珍しい。

「さっきもお誘い来たんですけどね。瑞樹さんが子供達の世話する日でしたから...。」

最近漚の口からよく出てくる二年の新城だろうか。さっき瑞樹が、勉強教えてもらうつもりだったのと言っていた。勉強なら俺が教えるのに... 模試が近いから気を遣ってくれたんだろうな。

「.....でその須波さんが頭良くて、」

「須波?」

「はいっ!」

二年の須波といや須波雅子しか思いつかない。瑞樹が毛嫌いしそうなタイプの子だと思っただが。

「頭良くて優しくてすっごく可愛いんですよー。」

「そっか。じゃあ子供達の世話なら俺がするから行ってこいよ。」
気を遣われてばかりは悪いしな。瑞樹には最近迷惑かけてばかりだから今日位は俺が面倒見るか。

「わかりました! 早速瑞樹さんに言ってきますね!」

「いや、俺須波には誘われてないけど。」

子供達に絡まれた瑞樹さんは意外性があつて素敵ですね。じゃなくって…

「学校では須波さんが他にも女子何人かと一緒だつて言つてましたよー？たしか北村さんと…。」

「そうその北村から連絡来たの。須波が居るとか聞いてないな。」

「須波さんも来れなくなつたつて事でしょつか。」

「だろーな。」

まあそういう事にしておきましょう。そっぴや須波さん、北村さん達といつの間にか仲良くなつたみたいですね。本当に良かったです！

瑞樹さんは難しい顔で、子供達をおんぶしたり膝枕したり、普段の瑞樹さんからでは想像出来ない光景でした。

「須波つて北村達と仲良くなつたのか？」

「よくわかりません。」

「だよな。」

考え過ぎたかな、と子供達をあやす瑞樹さん。俊兄様が代わると言つてましたが、このままで良いでしょう。見てて飽きませんしね。

女子からの誘いは高校では初めてだった。だから集合時間より早

く来てしまった。だが時間はすでに2時50分。集合時間をもつて一時間過ぎてしまう。

「おかしいなあ……。確かに北村さん、ここに2時だって……。」

やはり携帯のアドレスを訊くべきだっただろうか。でも今まで自分を嫌っていた女子のアドレスを訊くのは勇気が居る。

そっぴいや何で急に仲良くしてくれたんだろう。

そつづつと考え事していると、頬に滴が掠める。雨が降ってきたようだ。須波は傘を持ってきていなかった。

雨宿りをしようと周りを見ても、見つけたのは子供が入れそうにない居酒屋くらいだ。

ふと、前にも似たような事が無かったかと、思い出す懐かしく辛い思い出。認めたく無かったけどやはりそうなのか。

「嘘だった……のかな。」

騙された、という事が。改めて認めてしまうと、自分が情けなく思えてしまう。

純粹で優しく滅多に人を疑わないのが須波の性格だ。

「はあ……。っあう……。。」

泣くにも泣けない。自分が惨めで虚しくて、逆に笑ってしまいそうだ。力なくその場にしゃがみこむと、雨に濡れながら意味も無く細い声を漏らした。

すると、雨が急に止んだのを感じた。いや、止んだのではなく、須波の頭上に傘が差し出されたのだ。

「……須波？」

傘の持ち主は待ち合わせの場所に出てきた新城だった。

見つけた恥ずかしさより、人が居る安心感からか、須波の大きな両目から涙がどつと溢れ出た。

「まあトロいし趣味変だけどあそこまで嫌われる理由がわかんねえんだよな。」

流れて須波の話題になったので、子供達を昼寝させながらそう漏らしてみる。実際女子の考えてる事は俺にはわからん。

「そっぴや眞宏が、省いたりいじめたりするのに大した理由なんて殆ど無いって言ってたな。」

あいつの考えてる事もよくわからない。

「普通に仲良く出来ないんですかねー。」

澪が言ったその一言は人間の永遠の課題でもある気がする。大袈裟か。

話したくなかったけど、まさか話すことになるとは思って無かったけど、私はいつの間にか新城君に全て漏らしていた。

雨宿りしようという事で、ちよつと歩いた所にあるファミレスに行く新城君になぜかついていく私。ああもうやだ疲れてるんだなあ。そっぴやお昼まだだったけ。新城君が食べてるねぎトロ丼が美味しそう。

「何か食べれば？」

「あ、いいや別に。持ち合わせ無いし。」

居辛いなあ。この人と居る時はいつも瑞樹君と澪ちゃんが居たから。それに未だに怖いもん。見かけによらず良い人だ、つてのはわかるけど。…私の話を黙って聞いてくれてたし。

「金なら払う。今日は臨時収入があったし。」

「いや悪いよ…。バイトしてるの？」

「家の店の手伝い。須波が待ち合わせてた所、俺の家なんだよ。」

「そっかぁ…。」

「……………」

会話が續かない。やっぱり自分駄目だなあ。

今日何度目かの自己嫌悪に陥つてると、新城君が私に小皿を差し出していた。上品に盛り付けられた抹茶アイス。

「頼んだけど早めに持ってきたから溶ける前に食って欲しいんだけど。」

美味しそうだなあ。本当に食べて良いのかな。空腹にアイスはいきなりだけど何でも良いや。貰っちゃえ。

「頂き…ます。」

スプーンで少量掬い、口に入れる。舌で転がすと広がる優しい甘さ。自然と顔が緩んだ。

「美味しい？」

「うんっ。」

「良かった。」

笑う新城君を見ると、やっぱりわざとなんだなと思った。突然の氣遣いに、また涙が溢れ出す。

「何で泣く…。」

「ごめんなさい、と言ったつもりだったけど、声にならなかった。

「早く食べて出るぞ。」

見ると周りの視線が冷たい。本当ごめんなさい…。

「雨も止んだし帰るか？」

新城君がそう言つて、行き場が無い事に気付いた。いつも家に居る母には出掛けると言つてあるし、しかも母も用事で家は鍵かかつてるし…合鍵なんて持つてないし。

その事を言つたら「じゃあ付き合えよ。」とサラッと云うから過剰に反応してしまった。スプーンを床に落としてしまう。

「どうしたよ？」

「何でも無い…です。」

この場合の付き合っ、の意味なんてわかってるのに。馬鹿じゃん私。今に始まった事じゃないけど。

「瑞樹さんがどうにかしてくれれば良いじゃないですか。」
「は？」

子供部屋を片付けてたら…いきなり何言い出すんだこいつ。

「あたしに友達を紹介してくれたように、須波さんとみなさんの仲を取り持つてくださいよー。」

「連中が簡単に須波を受け入れるかよ。馬鹿だから誰かハブいてないと気がすまないもんなの。ああいう女子共はさ。」

だからみんな仲良くなんて出来るわけがない。零は理想を求めすぎだ。

「酷い言いようですね…もしや女友達のみなさんを嫌ってたりします？」

「別に、馬鹿だと割り切ってるから何とも思ってねーよ。同じクラスだから関わってた方が都合が良いんだ。」

男子連中だっ、てそうだ。だから友達というより、殆どが仲の良いクラスメートだ。

「なんか瑞樹さん見てると寂しいです。」

「どこが？俺の周りにはこんなに人で溢れてんのに。」
零にゴミ袋を押し付ける。

「下らない事言っ、てないでこいつ捨ててこい。ついでに俺やひい姉や麻衣や結愛や俊兄の部屋のゴミ箱も見てこい暇人。」

「……………わかりましたよこの冷徹魔神。」

だからこいつで言葉覚えてんだろ。またひい姉が変な漫画貸

したか。

寂しいか。俺が寂しいと感じるなら、それは姉貴に対してだけだ。

「どんだけ取れるの…？」

「あー、まだまだ。」

連れて来られたのはゲームセンター。新城君はさつきからUFOキャッチャーで私が指した物を取っては渡し、取っては渡しの繰り返し。腕や鞆が景品で溢れ返っている。

「ねー何でこんなに取るの。」

「ウチの従業員に欲しいから取ってこいと言われたから練習も兼ねて。」

「従業員？」

「店のホステスだな主に。」

年上の女性にねだられて渋々とUFOキャッチャーに向き合う新城君の姿が浮かぶ。

「新城君って彼女の頼みとか断れない人？」

しまった、いきなり距離を詰める質問をしちゃった…。失礼だったかな、と思っただけ苦笑して答えてくれた。

「かもなあ。今までの彼女年上ばっかだから。」

「もしかして従業員さんに彼女が居たり！」

「……………」

「ごめんなさいっ！」

いくら良い人っぽいからって調子乗り過ぎだよ自分。友達と思われてないかもしれないのに、私も友達とか思っただけ…。

「まあその通りかな。」

「本当ごめんなさい…。」

「良いんだよ。ノリで告られて付き合って、ノリで振られたみたい
なもんだから。本気の恋愛じゃない。」

何だろう。そう言う新城君が凄く寂しそう。

「残念な事に友人関係なんざもつと悲惨だからな…つと、マズい、
金が底を尽きそうだ。」

「新城君…。取りすぎだよ。」

「そういや、友達とゲーセンはほぼ初めてだったな。」

ああ、私もだいぶ久々だなあ…。つて今新城君、友達と言っただけ
ど…。

「ずっと友達が欲しかった。」

「そっか。」

「俺、須波の友達になれるか？」

新城君を初めて見た時、一人が好きそうだなって思った。雰囲気
が近寄り難くて。だからこんな事を言う人だなんて、友達に憧れて
る人だなんて思ってなかった。

「なれるよっ。友達になる！」

だって私も一緒だから。

嫌われてもやはり友達が欲しい。いくら男子に良い寄られても良
い気分はしないし、吐き出す所も無くて。ずっと一人でもやもやと
したものを抱えてた。

「寂しかった？」

ブラブラと帰路を二人で辿る。遊んだ帰り、なんて夢みたい。女
友達じゃなくて、しかも親子みたいな身長差のある男子だけど。

私の短い疑問に「そうだな。」と新城君は答えてくれた。

「意外。なんとなく一匹狼っぽかったから。」

「まさか。一人になるのはそんなに好きじゃないぞ俺は。」

「意外。ごめんだけど意外。」

「そればっかだな。」

「ごめんってばあ。」

寂しいって思う事は罪のように感じてた。嫌われてるから求めちゃ駄目だって。

そんな風に卑屈な私と違って新城君は素直で真っ直だ。

「じゃあ俺はここだから。」

「うん。」

「今日はありがとな。…また話聞くから。」

「うん！またね。」

新城君が家…というかお店の中に入ると女の人達の声。ゲーセンの景品をねだってたという人達かな。私にもくれたけど。

なんだか新城君はやっぱり意外性の塊だったな。今日話してみてささくれていた心が丸くなった、そんな感じ。一緒に居たら変わるかな。

「本当に冷蔵庫魔神なんですよ瑞樹さんは！」

「面白いな冷蔵庫魔神。澪が考えたのかな。」

また瑞樹と喧嘩したんだろうか。部屋に入ってくるなりベッドに飛び込んで愚痴を言い始める。

「瑞樹さんは寂しくないんですかね…。」

「どうして。」

「なんといいですか…心を通わせる人が居ない…よくわかんないんですけど。私が考えてた人間の友達関係とは違ってて。」

無理もない。俺にだって瑞樹は理解できない。

「良いんだよわかんなくなたって。理解されたくない事や知られたくない事もあるんだし。」

「へえ、じゃあ俊兄様にもあるんですか？」

目を見開いてじっと俺を見ている。嘘をついてもバレそうな、そんな目。

「……………ある。俺だって人間だ。」

「じゃあ私が俊兄様を理解できるようになれますか？」

「さあ。」

漣はわかってないんだろうな。基本的に抱えてるものが違う人間は孤独で、それをわかった上で手を取り合って生きている。ここ、「色彩荘」に居る面々が特にそうで、傷を深くえぐる事はしないが寄り添って暮らしている。

「俊兄様？」

漣が心配そうに覗き込んでいる。

「顔色悪いですよ。」

「悪い。」

眉間にシワが寄っていたようで、力んだ目をこすっていると漣が抱きついてきた。

「理解できないけど、癒やす事はできますか？」

「漣？」

「だって寂しいじゃないですかっ。」

「ごめん、と呟いて頭を撫でる。」

「その気持ちだけで十分だよ。」

俺からしてみたからよっぽど漣の方が理解できない。こうやって突き放そうとする俺を好きだと言っただから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2483t/>

彩りのマーメイド

2011年10月5日03時10分発行